へられた動作を云ひあらはす場合に用ひられたものであらう。續記宣命に、

（上略）却りて身を滅し災を蒙りて、終に罪を己も他も致（イタシツ）都。これによりて天地を恨み君をも怨（ウラミヌ）奴。（中略）然るものを口にあは淨しと云ひて、心にきたなきをば、天は覆はず地の載せぬものと成（ナリヌ）奴。此を持つ伊は稱を致し、拾つる伊は謗を招（マネキツ）都。

これは皇位を求むる人の心について述べ給へるもので、「罪を己も他も同じく致すものである」「天を恨み君を怨むに至るものである」といふ一般的事實を述べてゐるのであつて、「つ」も「ぬ」も具體的事實が過去に屬したのでも、完了したといふのでもない。

「ぬ」と「つ」とは共に完了態と云つたが、その間にまた自ら差別があり、前者は單なる完了、後者は完了とともに動作の惹起す結果の觀念を伴ふもの。その區別を示す爲には余はかりに一を完了態とし一を已然態といふ名で呼んでゐるが、相通ずる意味をもつて總括して廣義の完了態としておく。くはしくは拙稿「つ、ぬの本質」（「國學院雜誌」第廿二卷八號乃至第廿三卷六號）を參考されたい。

「り」と「たり」とは、繼續・存在・完了の三態をあらはし、「り」の方が古い。又「り」は後世は主として完了につかはれるが、上代語では繼續・存在をあらはす方が多い。「り」の原義（「あり」の膠着）を保存してゐるのである。記紀に於ける用例の統計をとると、

繼續態	五	
存在態	二九	
完了態	一	

唯一箇の完了態の例は、

よくすに釀める大御酒

といふので、古事記には「かみし」とある。紀の「かめる」は新しいものであらう。後世に多く發達した「り」の完了態の用法はこの時代には却て殆ど存在しなかつたことが分る。

「たり」は動作態をあらはす形式として、最も新しくあらはれてゐる。中古以後盛になつたもので、後に至るほど、「り」よりも勢力を得たことは、次に掲げる統計が示してゐる。「たり」は紀記には存在しない。もしありとすれば遠飛鳥宮の歌に、「汝が佐陀賣流（ナダメル）」とあるのを、守部が「稜威言別」に佐陀賣多流と補つたものがあるが、これは守部が濫に加へたもので、記紀にはほかに「たり」が一つもないのを見れば、古い頃にこの形の存在は疑はしく、萬葉の中でも上國の言語より古い形と思はれる十四・二十の卷には唯一個づゝあるだけである。然るに十七の卷には九個、十八の卷には七個、十九の卷には七個、之を「り」と比較する時は、その率、次の如く後に至るほど增加してゐる。

	記紀	萬一四（萬一七	同一八	同一九）	計	土佐（源氏	同	明石）	計	十六夜
り	三六	十五	二六	一九	一四	六九	九六	五三	六二	一一五	一六
たり	○	一	九	七	七	二三	三七	九四	八二	一七六	四五
	0.0%	6.2%				25.0%	27.8%			60.4%	73.7%

この統計にも見える如く、「たり」は奈良朝時代に漸く現れはじめ、次第に勢力を増して、遂に後世「た」となると共にもつぱら過去をあらはす助動詞となつた。

時の助動詞のうち、「き」はもつとも早く影をひそめた。鎌倉時代に於て、既に「き」のかはりに連體形の「し」が多く用ひられるやうになつてゐる。

父子共に朝恩にあづかりし（平家）

一所に死なんとて契深かりし（同）

之についで「ぬ」が亡びた。「つ」「ぬ」は並ぶものと普通云はれるが、室町時代には「ぬ」は亡びてゐるが、「つ」は用ひられてゐる。

サル程ニ范蠡ハ吳ヲハ我カ功テ破ツ（錦繡段抄二）

今日マテ士民ナレトモ、シツル事カ候ソ（蒙求抄五）

後ニ學問シタ時ニ、ネツタウ、ステツラウト云レタソ（同一）

人ノ地ヲ借テ田ヲ作ツ畑ヲ作ツナトシテ母ヲ養タ事ガアルソ（同一）

果然サミツル事ヨ、打レタハ又マツサウアラフスト思タ（碧巖抄五）

橋はひいつ、敵にはあひたし、鎹を傾けて立つた所に（天草本平家）

妬う馴れつらう返すぐ〳〵（閑吟集）

などつかひ、いまも「行つつらう」「遣つつらう」「死んづらう」などの形が、方言（山口縣など）にある。「つら」といふ形は、山梨・靜岡・岐阜等に存してゐる。「けり」は「ける」といふ形に於てのみ殘り、感動の意味に於て用ひてゐる方が多い。

マウサテハ我ガ運ハ盡タケルトテ、ムクト起テナコリヲシミノ酒ヲ飲ソ（史記抄五）

今日用ひる「たつけ」はこの形から來てゐる。靜岡方言には「見つけ」「降るけ」の如きものが殘つてゐる。「浮世風呂」には西國者の言葉として、

ぎら〳〵する事、鯨ども洗ふた跡どもの如あるけへ

とある。

時の助動詞の多くが次第に亡び去つて、最後に殘つたものが「たり」の變化「た」である。およ

そ院政時代に、「たり」から「た」が出來てゐたことは、保延頃の歌人藤原爲忠の家集に、歸雁を題に、

時きぬとふる里さしてかへる雁こぞきた道へまた向ふなり

と云つて、「來た」を北に言掛けてゐることで分る。又、

誰ソト問ヘハ鳥羽ヨリ女房ヲ只今打入テ殺シ奉リタトハ何事ソト云(平家延慶本)

根井又立出テ使ノ雜色ニ猫殿ノ參リタトハ何事ソト云(同)

と見えるから、院政から鎌倉時代にかけて口頭語の上に、おひ〳〵出來てゐたものに違ひない。室町以後はそれ故に「た」が過去の意味にも使はれ、又種々の動作態にもつかはれてゐる。過去の意味のほか種々の動作態につかふことは次の例に見られる。

梅ト此花ハ、ヲトツタカマサツタカ、定等差ヲ定メウソ(山谷詩抄、一五)

或人肉臠を銜んで河を渡るに、その河の眞中で銜んだ肉むらの影が水の底に映つたを見れば己がふくんだよりも一倍大きなれば影とは知らいで銜んだを棄てゝ(天草本伊曾保)

物の數でもない小鼠どもをわが手にかけて殺さうこと、かへつてわが名をけがすに似た(同)

學文ズキデスグレタ才ガアルソ(蒙求抄五)

面テノ詞トハ絶妙ノ詞ヂヤトホメタ心ソ(同)

家語ニ少々アレドモチガウタソ(同)

の如きは、決して過去ではない。文語の「たり」は形容動詞につかないのに、「た」は室町時代に、

一義ニ官次ガ、イヤシカリタソ(蒙求抄七)

是ガス、メタ者ニ、アグナ者ハナカツタソ(同)

命にもかへて惜しかつた馬を(天草本平家)

の如く用ひてゐる。これは過去の助動詞としては、「た」が唯一のものとなつたことを示すものである。

連體には「たる」を用ふることがある。その例、

煬帝ノ宮殿ノアトハ百姓ノスミカトナツタルニタトヘタソ(三體詩法抄二)

人ノ死ンダルシヤレ頭ヲトツテアツメ置テ(同二)

未然形「たらば」が「たら」となつてゐることは、次の如く室町時代既に今日の口語と同じ。

いとほしいと云ふたら叶はうずことか(閑吟集)

又次の如く單に物を並例するのも、今日の用法が當時に發してゐることを知る。

薪ヲ取ツタリ庭ヲハイタリスル形ソ(古文眞寶之抄)

已然形に「たれ」を殘してゐるのは、今日の口語よりも原形を保存するに近い。

徽宗ノ天子トナツタレハコソ、天下ハ定タレ(山谷詩抄、一五)

天子ノ明ナ德ガアレバコソ、臣ガソツトシタ功モナツタレトカウ云タソ(蒙求抄四)

未來の助動詞と云はれる「む」は「む・め」と活くが、その起源に遡れば、「まく」「まし」の「ま」もまた同じ性質のものと云はなければならない。東國方言では、なほ「も」といふ形もある。已然形の「め」は、平安朝を以てその生命を終り、「む」は母音を失ふと共に、[m]が[n]とかはり、同時に[u]とかはり兩者並び行はれたが、否定の助動詞に「ん」を生ずると共にもつぱら[u]をのみ用ふるやうになつた。

院政時代にすでに「う」を生じてゐたやうである。

先帝聖靈ニコ、ロサシタテマツラセタマハウニウタカヒナク(法華百坐)

イキタラム師子ノ血トリテタテマツラムモノニハマウサウニシタガヒテ賞ヲヲコナヒ(同)

古事談に、山林房覺遊といふ奈良法師が、合戰の日、いち早く逃げたので、先陣房カクレウといふ綽名のついたと云つてあるのは、「隱れん」を「かくれう」と云つた爲であるが、こんな秀句にまで用ひたのは、鎌倉時代にはもはや口頭語の上では、一般に「う」の方を用ひてゐた爲に

ちがひない。

「う」は又一部は「よう」となつた。「む」が「う」になつたとき、はじめは、

(一) 行かう　來う

(二) 受けう　爲う

(三) 起きう　見う

になつたが、ついで四段・奈變・良變以外に於て、

(四) 受けよう　起きよう　見よう　來よう　爲よう

といふ形が出來た。閑吟集に、四段・奈變・良變以外の動詞の未來形のあらはれてゐるもの合計十三箇あるが、そのうちに既に後に「よう」といふ助動詞を生ずるに至る端緒が見えてゐる。

忘れう　來う　爲う　暮れう　何爲う　爲よう　寢う　爲ようずらう

見う　入らせう　入れう　何と爲うぞ

いづれも單純に「ん」が「う」となつただけであるが、そのうちに「爲う」はまた「しよう」といふ假字を以て書きあらはされてゐる。「う」は動詞の語尾と融合して長母音となつてゐたことを示すもので、「せう」はオ列拗長音となつてゐた爲に、「しよう」とも記してゐるのである。今日の

ごとく、「し＋よう」ではない。

これが進むと、多くの動詞の未來形がオ列長音もしくはその拗音であることから、上一段・上二段の動詞にも之に類推して、次の如きものが出來た。

見よう　　亡びよう

これもまだ後世の如く、「よう」といふ獨立した助動詞を分出してゐないことは、天草本の平家や伊曾保などに、歐字綴で「見ようと」「亡びよう」をあらはしたものが、

meōto　　forobeō

となつてゐるので分るが、之が繰返されると、そのうちに「よう」といふ音を獨立のものとして分析して來る。この分析にハ行ヤ行ワ行の二段動詞の未來形が、語尾と融合して「仕(ツカ)よう」「見よう(見えんノ意)」「植(ウ)よう」の如く、「よう」そのものとなつてゐたことが、大いに關係のあることは、まづ考へて見なければならない。現に抄物にもすでに「よう」と假字書きにしてゐるのも稀でない。

トナヨウスラウ(時)(桃源抄一)

ナニカ孤ナル楚ト中ヲヨクセウトテ六百里ノ地ヲアタヨウソ(史記抄一〇)

涯分扶持ヲクワヨウナント、云ソ(同三)

その結果「よう」が取離されると、動詞はもとの動詞の形を傷けられ、その概念を現すに足りないから、あらためて動詞の未然形に附けるやうになつて、今日の如き、「おぼえよう」「見えよう」「起きよう」の如き未來形を生じたのである。これはおもに江戸時代に關東方言の上に出來た。左變が「しよう」で、未來形を「し」として受けてゐることも、その一つの證據としてよからう。それ故に、江戸時代にも關西方言に屬するものには、依然として、次の如く見える。

主從の盃をせう(萬歳丸)

何と其方は下人か何と其方も抱ようか(同)

やがて歸參するやうに御水をあげう(一心女雷師)

見るもの毎に惚れうならば(同)

江戸時代中期には關東では

もう出ようか〳〵おもふたが(八景聞取法問四)

今夜は我らちともめやうとて笊蕎麥を二分が買へば(同)

來年の盆には必ず來ようとおもふな(同三)

のやうに、四段以外には皆「よう」、たゞ左變だけは

一盃せうといへば（八景聞取法問三）

と使つてゐる。從つて、後期の浮世風呂、浮世床等にも、皆その例で

内の用心を見やうと思つて手燭を持つて（浮世風呂）

小裁を見つけたら拵へよう〳〵と思つた所（同）

雲とつけやうか（浮世床）

左變だけやはり「せう」が多いが、間々

ム、仕やうヨ（浮世風呂）

の如きものが見えて來た。

室町時代以後の未來の助動詞を數へるならば、「う」「よう」のほかに、「うず」を擧げなければならぬ。これは「んとす」の約つた「んず」が、平安朝時代に既に口頭語として存在したのが轉じたのである。院政鎌倉時代に既に「んとす」「んず」が單に未來をあらはし、やゝ「ん」よりは語勢の強いものとなつてゐたのである。

此ヲ取テ艶ズ調美シテ平芿ゾト云テ、此別當ニ食セテバ必ズ死ナムトス（今昔廿八）

父ノ御子此レヲ聞カバ此ク制止スルヲバ不レ知ズシテ、我ヲコソ被レ恨ムトスレト仰セ給ヒテ（同、二八）

慶喜トマフシサフラフコトハ佗力ノ信心ヲエテ往生ヲ一定シテムストヨロコフコヽロヲマフスナリ（親鸞消息）

これがまた、「うず」ともいひ、

名乘ラズ共頸ヲ取テ人ニトヘ、見知ウスルソトゾ、宣ヒケル（平家九）

千人ノ僧ノ中テ、大悟シタラウス人一人ニ布施ヲセウス、悟タラウ人ハ、名ノリ出ヨト云ソ（敕規桃源抄一）

コノ寒天ニ、イマチツトモイネタカラウズガ宰相ノコトナレバ出仕申サイデモカナハヌソ（中華若木詩抄五）

善コトヲモ惡ヲモ手本ニセウスルト云コトソ（蒙求抄一）

東坡ヲ以テ正トセウズ程ニ（三體詩法一）

百丈云ハフズ事カ光フテサヤウニ云ハル、カ（碧巖鈔七）

などいふやうになつた。この形が關西地方一般に行はれたと思はれ、天草本伊曾保物語にも、

是非に本望を達せうずる

せめん農人の所作なりとも宛がはうず

とあり、同じ天草本平家物語にも、

定めて北面の者どもが中にあらうず。
御幸をなし奉らうずると思ふはいかに

など極めて普通で、その後も元祿頃まで用ひられて近松の淨瑠璃などにも散見して居り、その上、方言として今日も三河・尾張・遠江・美濃・信濃の諸方に、「書かず」もしくは「書かあず」の如き形として殘つてゐる。卽ち關東方言に於ける「べい」といふ特殊の未來形に對して、關西方言の系統に屬する方言的形式となつてゐるものである。遠江地方の方言に、見セスカといふのは「見せようや」といふ反語の言ひ方であるが、旣に室町時代に疑問の形として見えてゐる。

夏殷周三代ニ九庶アラス歟、七庶アラウス歟ト云事カアルソ（桃源抄）

關東方言の「べい」は、推量の「べい」から來てゐる。人の名にまねて昔から「關東べい」と云はれたほど名高い特殊の語形である。「書くべい」「起きべい」などいふ。又「かくべ」「起きんべい」など變化した形もある。東京にはないが、關東の諸地方、東北の諸縣に用ひられてゐる。

安くば乘るべい（東海道中膝栗毛）
見付たら面の皮ア引めくつて呉れべい（浮世床物ノ上）

六　希望の助動詞　希望の助動詞の「たし」は院政鎌倉時代に現れたもので、自然、歌には當時嫌はれてゐた形迹がある。千五百番歌合の、

いざいかにみ山の奥にしをれても心しりたき秋の夜の月

を、判者定家は、「これを俗人の語にきくといへどもいまだ和歌によまぬ詞也」と批難してゐる。形容詞と同じ活用をしてゐるが、近代語に於て「たき」が「たい」となり、「たく」が「たう」となつてゐるが、室町時代には次の如く用ひてゐる。

シタイママニスル心ゾ、河山ヲモ分裂シテトラセタイ儘ニ取ラセタソ（古文眞寶抄）
實接ノ體ヲモシリタウヲホシメサハ（三體絶句一）

「たう」の否定で、「たう」に助詞「も」を挾んで「ない」を附けたものは、當時「たうもない」から「たむない」となつて居り、

少游ハ人ニ知レタムナカルソ（山谷詩抄、十）
高祖ノ人ニミヘタムナガラレタソ（三體絶句、二）

など見え、更に轉じて、

今日程參りとむない事はない（狂言、清水）
法華にはなりともなうおぢやる（同、宗論）

となつた。從つて「見たうもない」は「見たむない」となり、「見とむない」となつて、今日の「見ともない」即ち不體裁の意味の形容詞を作り出したと想像される。その反對の意味の語に「見たもよい」といふのがある。

張毅カ事ヲ莊子ニ云ハ見タウモナイ程に（山谷詩抄、十一）
ミタムナイカホガ猶ミタムナカツタ（蒙求抄四）
薪ウルタニミタムナイニト云ヘバナヲ歌ソ（同、五）
狩の門出に見とむない奴めが行居る事ぢや（狂言鹿狩）
アレカ女房ニミタモヨイソ（山谷詩抄、十三）

七　推量の助動詞　推量の助動詞の「べし」は形容詞と同じ活用をなし、形容詞に非常に似た性質を持つてゐる。語幹が單獨に用ひらるゝ如きは、その著しいものである。

いはむすべせむすべ知らに（萬五）

この「すべ」は動詞の「す」と語幹「べ」の複合して出來てゐる熟語である。形容詞の語幹が熟語を作るのと同じ趣がある。語幹に接尾語の「み」「ら」が複合して「べみ」「べら」となることも、形容詞の語幹に似てゐる。

いた泣かば人知りぬべみ（紀）

これは形容詞の「里遠み」「春淺み」の如きものと比すべきものである。

「べら」は「べらに」と用ひ、又之に「あり」が複合して「べらなり」と用ひるのは、形容詞の「清らに」「清らなり」、「さかしらに」「さかしらなり」などと比すべきものである。「べらに」は稀であるが、今昔物語に、

不レ知ヌ茸ト思スベラニ獨リ迷ヒ給フ也ケリ（今昔廿八）

と見えてゐる。又その連用形「べく」が「あり」と複合して、「行くべからず」の如き形に用ひられることも、形容詞の「多からず」「少からず」の如き例と比較すべきものである。

「べみ」は奈良朝時代に活動した語法で、平安朝には詩語のうちにのみ殘り、「べら」は平安朝にのみ特有な語法で、延喜前後殊に貫之の歌に多い。

散りぬべみ袖にこきれつ藤浪の花（萬）
さほ山の柞のもみぢちりぬべみ（古今）
見渡せば松のうれごとにすむ鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる（土佐）

平安朝時代に音便で、「べく」は「べう」となり、「べき」は「べい」となつた。

車より落ちぬべうまどひ給へば（源氏桐壺）
いまゆくすゑはあべいやうもなし（更級）
思へば怨めしかべい事ぞかし（源氏胡蝶）

この助動詞は「べい」「べう」といふ形で、後世までも行はれた。

ナカスヘイ處テ、ナカセ、ワラハスヘイ處テ、ワラワスルヤウニ機ニ應メスルソ（桃源抄一）
然るべい使があらば（天草平家）
是シカルベイ者デアツタゲナ（蒙求抄三）
壁立モ及ベウモナイソ（同二）

室町時代に終止形にも「べい」を用ふるやうになつてゐる。

物外トヨミツケタカ、物外トヨミツヘイ、智證大師ノ、唐テ物外ニ問タカソレモフツトヨミツヘイト、
北林ノ云タ（山谷詩抄十三）
定めて今は八島の大臣殿の見參にも入りつべいと存ずる（天草本平家）

今日關東方言に特殊の未來をあらはす「べい」と云ふのは、この助動詞の活用中、今日に殘つた唯一の形である。室町時代に、

循吏傳ヨリハ、儒林ハ上ニアリツヘシイカ、ナニトシタレハ、下ニアルソト云ヘハ（史記抄一五）

眞ノ山ノ居所ト云ツベシイ體ソ（三體詩法四）
雨原憲が樞に濕ほすともいつつべしい（天草本平家）

と云ひ、又稀には

翰墨場テハ伏波トモ、云ツヘイキカ、ナニモショウハ、ハヤ年カヨツタソ（山谷詩抄十四）

など「べしい」「べいき」とあるのは、「べし」の變化の上にあらはれた一種の異例であるが、「つべし」が慣用語として用ひられた爲に、この時代に偶然生じた特殊の形であらう。「つ」と共に用ひられた場合にのみ現れるものである。「べし」は用言の終止形が亡びると共に、その所屬に迷つて未然形につく例が多く出て來た。足利義滿の頃の「今川大双紙」には、

馬の右を御めにかけべし。
馬の左のむなかひを取ておしつめてかけべし。
しゐてのらせべからず。
手をそへてさげべし。

の如くすべてこの形で使つてゐる。又抄物には、次の如く見える。

見ラレベキトコロノ實景ソ（三體家法三ノ三）
吳山ノ景氣ヲ、ナカメラレベキソ（同）

「まし」は現實に反する想像をあらはすに用ひ、平安朝時代には、多く上に假定の條件をおいて、

この風今暫し止まざらましかば、潮のほりて殘る所なからまし（源氏明石）

見し人を松の千とせに見ましかば遠くかなしき別せましや（土佐）

のやうに用ひ、その活用形は、

まし（終止）　まし（連體）　ましか（已然）

としてあらはれてゐる。

さてその紛れに我も人も命堪へずたりなましかば、いふかひあらまし世かはと思し直す（源氏若菜上）

これが連體形の例である。奈良朝時代には、已然形がなかつた。それ故に、宣長は活かぬてにをはとして居る。

奈良朝時代にもある「ませ」といふ形をもつて、未然形のあつたものとする說がある。大槻博士をはじめとして、この說を持する人があるが、どうであらうか。宣長は玉緒に、これを「まくせば」の約といひ、義門は「玉緒繰分」及び「活語雜話」に、「行かまほし」などの「ま」に左變の未然形「せ」が添うて出來たものと云ふ說を唱へてゐる。近代語には、亡びて用ひられなくなつた。

「めり」は、萬葉集十四に、

小草男と小草助丁と潮舟の並べて見れば乎具佐可利馬利

とある可利馬利を元曆本・類聚古集等に可知馬利とあるによつて、「勝ちめり」と訓み、奈良朝時代に「めり」のあつた一つの例とする人もあるが、ほかにその用例もないし、連用形を受けてゐるのも異樣であるから、この助動詞の奈良朝時代に於ける存在は疑問と云はなければならぬ。この助動詞は平安朝時代に生じ、多くは記載語として榮えて、後の時代にはやがて用ひられなくなつたものである。

この道もかしこからざめり（枕）

のごとく推量を原義とするであらうが、もと「目」「見る」などと語根を同じくし目擊する意味を現すところから、客觀的にさうと斷定してよいことを、「自分はさう見る」とやゝ斷定を控へる心持を持ち、斷定を婉曲に言ひ表す助動詞として用ひられるやうになり、院政時代以後は多くこの意味で用ひられてゐる。

例の人よりはこよなく年老いうたてげなる翁二人嫗といきあひて同じところにゐぬめり・・・さてぬし

の御名はいかにぞやと云ふめれば・・・ぬしはいくつといふこと覺えずといふめり・・・それにていとやすく數へてむといふめれば（大鏡）

「らし」は奈良朝時代には、

らし（終止）　らしき（連體）

と活用し、連體形として、

古も然なれこそ空蟬も妻を爭ふらしき（萬一）

の如き形を示してゐるが、平安朝にはたゞ「らし」だけになり、左の如き用法となつた。

らし（終止）　らし（連體）　らし（已然）

み山にはあられ降るらし外山なるまさきのかづら色づきにけり（古今）

ふる雪はかつぞ消ぬらし足引の山のたきつ瀬音まさるなり（同）

松のねに風のしらべをまかせては立田ひめこそ秋はひくらし（後撰）

今日の口語の「らしい」は又別に接尾語から轉じて出來たもので、

らしく（連用形）　らしい（終止連體形）

とはたらいてゐる。

「む」「らむ」「けむ」は奈良朝から平安朝にかけてひろく用ひられ、平安朝には「ん」「らん」「けん」と發音がかはつた。「む」は未來の推量又は時に關係のない推量につかふ。未來の助動詞は之から出たものである。「らむ」は現在の推量につかひ、隱れたる事實を推量し、又眼前の事實から隱れた事情を推量する意味もある。

あごの浦に船のりすらむをとめ子が珠裳の裾に潮みつらむか（萬一）

立田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散るらむ（古今）

前者は行幸の御供にある女房を、京に在りて人麿が想ひやつて詠んだもの、後者は秋の木の葉のちるを見て、立田姫のぬさを手向けられるのだらうと想像してゐるのである。もしさる事情の分らぬ時は、疑問の語を加へるが、平安朝の和歌ではそれを省くことがある。宣長が玉緒に「かな」に通ふ「らん」といつたのは、この種のものである。

知るといへば枕だにせでねしものを塵ならぬ名の空にたつらむ（古今）

春の色のいたりいたらぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ（同）

院政鎌倉時代以後「らう」となり、室町時代まで用ひられてゐる。

得サレバコソ得タレ、得タラハ得サラマジ賢得サリシケフニ得サルラウニト說給ハマシ（沙石集）

千年ニモ二千年ニモナルラウト思フ古木ノ（湯山千句）

女ノ身テサコソアルラウ（山谷詩抄、十二）

傳書樣ナ事モアリヤセフズラフト（三體詩法抄四）

其心はナントアラウズラフ不レ知（同四）

嗚呼我兄弟共ガ高キニノボツテ、頭ヲアツメテ會スル處、皆遍ク茱リヲサシハサミソスルラフ、我一人其席ニ陪セヌコトソ、アナタニモ思ヒタスラフナリ（三體絶句五）

平安朝以前には、動詞の終止形についたものが、連體、終止同形となつてからは、連體形についてゐる。

江戸時代にも、

其方も彼袋の類と思ふて居つろがおれがやうなこすいこな者に見付るが因果（八景聞取法問一）

のやうなものは見えるが、次第に衰へて、中國四國地方の方言に「ゆくらう」「行つつらう」など殘つて居るばかりである。

「けむ」は過去の推量の助動詞である。奈良朝時代には、「き」の未然形「け」が「けまく」「けまし」など推量の助動詞に接續するのと一般、「む」と連結したもの。平安朝時代には「けん」となり、古代語として亡びた。

八　指定の助動詞　指定の助動詞の「あり」は存在を意味する用言であるが、之が「に」と結び付くとき、「なり」となつて、命題を作る繫辭の役目をする。この「なり」を指定の助動詞と云つてゐる。「と」と「あり」の結びついた「たり」も指定の助動詞と云はれるが、「なり」の如く古い起源のものでなく、漢文訓讀のため起つたもので、形容動詞と云はれる、「昭々たり」などの「たり」と語形の起源は同じで、

汝ヂ宿業拙クシテ今生貧キ身ト有リ。而ルニ勤ニ我レヲ念ズ云々（今昔、一七）

但シ貧シキ身ト有ルニ依テ、命ヲ存セムニ便无シ（同、一二）

かゝる用法から出てくる。中古文學にも、

あくれば五日の曉せうとたる人外より來て（蜻蛉）

よみとげむ庵たるべくも見えなくに（古今六帖）

のやうなものが少し見えるが、多くつかはれるに至つたのは、後に和漢混淆文の行はれるやうになつてからである。

室町時代には、「なり」の連體形「なる」が「な」となり、終止形も同じ形を用ひて、

唐ニハ度牒ヲ取カ大事ナソ(勅修百丈清規、兩序章)
誰モ無力ヲスル者ナ程ニ(蒙求抄四)
形ヲ土木ニスレドモ天然人爲ナホドニ(蒙求抄二)
竹雲ノ本ハ無點ナホトニゴテコソ候ラウソ(同四)
見ヘカタ谷詩眼モ明ニ成ル樣ナソ(錦繡段抄三)
梁ハ横ナ、柱ハ竪ナ、横ナモ竪ナモ、各其用ニタツト云ハ(莊子抄一)

などなつたこともあつたが、「にて」の約つた「で」と「ある」とを連ねて、「である」といふのを用ひるやうになり、それを省いて「であ」といひ、又約めて「ぢや」「だ」となつたものが、その後一般の指定を現すものとして使はれてゐる。ロードリゲースの語典に、「であ」が正しく、それをぞんざいに發音する時、「ぢや」となると說明してゐる。

李善が自ラスル註デアル程ニ(三體絕句一)
さてはこれこそ宮の御首であると定められた(天草本平家)
凡人よりも重罪に附することであ(天草本伊曾保)
常人ニハナイ物ヂヤソ(湯山千句)
路ハ相伴ヂヤ程ニ、腹立スマイ事ヂヤニ腹立シテ(蒙求抄四)

室町時代には、これらの形は相通じて用ひたのである。

身ハ威儀デアルホドニ律ソ、ロハ經ヂヤホドニ敎ソ(勅修百丈規兩序章)

室町時代に於ける「だ」の用例は多くはないが、次の如く見える。

楚項羽ニ書ヲ學セタレハ書ハ只姓名ヲシルス程タニ書ハ無用ト云ソ(湯山千句)
是不是共ニ打テ落シケヅリ落ス末下ニアル活處ダソ(葛藤集)
無所得ニシテ理知ノナイガ獅子吼ダソ、理致は野干鳴ダソ(同)
身命ヲカエリミヌ所存カ猛虎ダ(同)

これらは「ぢや」と混じて用ひてゐる。「ぢや」は後には終止にのみ限られるやうになつたが、初は連體形としても用ひて、

ソサウナト、云レタ者ヂヤサヘ、是ホドニ念比也(蒙求抄八)
罪人ヂヤ程ニ(三體詩法四ノ四)
爰ハ玄孫デハナイ、彦ヂヤヲ錯テ玄孫ト云ソ(蒙求抄一)

「母ぢや人」「兄ぢや人」「親ぢやもの」なども、連體形の遺物である。稀に「ぢやる」といふ形も見えてゐる。

たゞ人には馴れまじものぢや、馴れて後に離るゝるるるが大事ぢやるもの(閑吟集)

「だ」と「ぢや」とは、關東と關西とで相對立する二種の形である。室町時代のものに見えるのは、おほむね「ぢや」であるが、抄物のうちに「ぢや」に稀に混じて「だ」が用ひられてゐるのは、關西でも「だ」を用ひたと考へるよりも、抄物は講義筆記であるから、筆記した人が關東出身のものであつたりする場合、その方言を混じたものと想像して然るべきものであらう。「倭訓栞」大綱に助語をつゞめることを説明した所に、尾張の人は「でや」と云ふのを江戸の人は「だ」と云ふとある。

國語調査委員會の「口語法別記」に、

だは東國の口語であるが、古くつかつてゐたか分らぬ。書物に見えるわ、江戸時代からで、それも初わ誠に少ない

と云つて、

西翁十百韻西國にて、くれないか是非是非花を所望だぞ

雜兵物語、上、足輕小唄　なまくらものでは切ぬものだ。同、上、槍擔小唄、各の腹中にあるべい事だ。とおもひ申せ

などあげてあるが、室町時代の文獻に「だ」と見えることが少いのは事實であるが、それは皆關西方言で書かれてゐる爲で、事實は「ぢや」と並んで關東方言では「だ」を用ひ、それが稀にはこの時代の文獻にも現れてさきに示した抄物の數例の如きものがあるのである。

指定の對話語は、「あり」の丁寧な言ひ方が「侍り」「さふらふ」であるから、古代語に於ては、「にはべり」「にさふらふ」又は「にて侍り」「にて候ふ」で、

めづらかなる事に候ふとかたる（更級）

しかそれさる事に侍り（大鏡）

此らはもとより覺悟の前にて侍れは（保元）

是は東國方より出でたる僧にて候（謠曲融）

など云つたが、近代語では、「でございます（でございます）」「です」を用ひるやうになつた。

「ござる」は「御座ある」の約つたもので、室町時代後期に出來た。はじめは「あり」の尊敬動詞であつたが、ついで、「ある」を丁寧にいふ語となり、つひに指定助動詞の丁寧な言ひ方となつた。

この宰相と申すは清盛の弟でござるが（天草本平家）

いかなる御事にてござるぞ（同）

はじめは單獨に用ひたが、後には「ます」と連結して「ございます」といふ形であらはれるやうになつた。狂言記などはその初である。

叶はぬ事でございまするに（烏帽子折）

是は御芽出度事でございまする（ひめ糊）

「です」は「ございます」より新しいもので、

遠國に隱れもない大名です（狂言萩大名）

羽黑山より出でたる駈出しの山伏です（同柿山伏）

京内參りをすれば主に暇を乞はぬ法ですか（同二千石）

など見えるから、室町時代にも既にあつたものだが、今日の如く「です」と云つたものでなく長音で、江戸時代の、

みかげの里に、かくれもない、びやくがうの彌陀六といふ男でゑす（一谷嫩軍記）

ひまでえすか（洒落本眞女意題）

傍あたりの鼻があぶねへでゑすは（浮世風呂前篇下）

と同じものである。又、

河内屋の與兵衛でやすとつつと入る（女殺油地獄）

ア、リよぐはいながら太夫でゑんす（加增會我）

などとも關係がある。國語調査委員會の口語法調査報告によると、

であす（青森縣南部）　だッす（山形縣北村山郡）　であす（青森縣南部）　だッす（山形縣北村山郡）　ぢやす（富山縣下新川郡舟見區域）

であんす（茨城縣、山形縣西村山郡、島根縣益田郡）　でえんす（島根縣益田郡）　だす（大阪府）　どす（京都府）

など種々の方言の形があるが、東京語で、「です」を使ふに至つた由來については、「口語法別記」に、「です」は、隨分古くから、つかつて來た語のようであるが、江戸でわ、元と藝人言葉で、輕薄な口調の「でげす」などと同じもので、明治以前わ、咄家、太鼓持、女藝者、新吉原の茶屋女などに限つて、用ひられて居たもので、その女が、素人になつても、「です言葉」が出て咎められて、困つたもので、町人でも、身分のある者わ、男女共に用いなかつた。それが、今のように、遍く行われるようになつたのわ、明治の初に、田舍の武士が江戸へ出て、柳橋新橋あたりの女藝者などの言葉を聞いて、江戸の普通の言葉と思つて、眞似始めたからの事であろう。それであるから、餘り馨ばしくない語であるが、今でわ身分のある人々まで用ひられて、もはや止められぬ程の言葉となつた」とある。「です」の語源については定説がない。中村通夫氏の「デスの語史について」（「國語と國文學」第百四十三號）は、これを研究する上に、參考すべ

き論文である。

九　比況の助動詞　比況の助動詞と云はれる「ごとし」は體言もしくは體言に準ずべき語と共に用ひられ、普通助詞「の」「が」等によつて接續し、一般の助動詞と云はれるものとは大いに性質を異にしてゐる。もと名詞の「こと」から出たもので、助詞とともに用ひられることに於て、その體言的の性質を多分に維持してゐるが、その職能用言と同じく文の叙述を成す力を持ち、活用も「く・し・き」と云ふ形を具へてゐることに於て、形容詞に似てゐる品詞である。それ故に之を形式形容詞といふ名を以て呼んでゐる人もある。はじめは「ごと」といふ形だけで用ひられ、記紀の歌にも「ごとく」「ごとし」「ごとき」の如き形は一つも見えず、常に用言を修飾するものとしてこの形だけで用ひられてゐるが、次第に形容詞のやうな活用を發達させた後も、未然形のごときは奈良朝から平安朝にかけて用例を見出し得ない。恐らく用ひられなかつたものであらう。院政鎌倉時代に、次の如きものを見るのは珍しいものである。

傳說ガ如クハ生タリシ時佛法ヲ不信ズ（今昔、九）

室町時代を過ぎると又次第に用ひられなくなり、見えるものは殆ど皆孤立した「ごとく」のみで、「ごとき」の如きは稀に用ひられただけである。これも助詞「に」もしくは指定の「な」等の助を借りて、

小利根デ、コソラコトヲ云マワル如クナホドニ（蒙求抄五）

兒女ノ如クナトハ誰カ思ハウソ（山谷詩抄、九）

大道ハ白雲ノ如クナ物ゾ（三體絶句抄三）

昔ノ漢武ノ如クニ驕ヲ極テ（同一）

のごとく云ひ、「如き」は「の」の助を借りて、

談義ヲ能スル人ヲ評スルト云如キノコト（蒙求抄二）

のやうに云つてゐる。この助動詞は次第に衰へて、

此畫ニ對スレバ、サナガラ月明ニ三峽ノ中ニアリテ、聞ク猿ノヤウナソ（中華若木詩抄中）

小柴屏ノ邊ニ殘花ガアルガ、雨中ニ見レバ泣クヤウナゾ（同、中）

鷹ノヤウナ人ヂヤ（蒙求抄一）

我等ヲ草木ノ中デハ芝蘭玉樹ノヤウニナシタイソ（同、一）

の如く、「様な」「様に」といふ形のものに由つて代用されて行つた。「ごとき」「ごとく」が形容詞類似の活用を持ちながら、形容詞や形容詞類似の助動詞等とちがつて、ィ音便・ウ音便を起してゐないのも、この形だけで孤立してしまひ、用法が局限された結果である。

十　禁止の助動詞　禁止の助動詞の「な」は、王朝時代に於ては、一般の動詞には終止形、良變動詞には連體形についたが、院政鎌倉時代以後、終止形が連體形に同化されてからは、すべての動詞に連體形に附くやうになり、今日も同様である。「なーそ」はその間に一般の動詞の連用形、加變左變動詞だけは未然形をおく。「そ」は係の助詞「ぞ」「ぞ」と同じもので、禁止の意味は「な」にある。初は

はなはだも夜更けてな行き(萬一〇)

の如く、「そ」を伴はないものであつた。「そ」の濁音であらはれてゐるものがある。

言痛(こちた)けば小泊瀬山の石城にも率(ね)て籠りなむな戀ひぞ我妹(常陸風土記)

然るに、後に「そ」のみで禁止をあらはす形が出來て來た。平安朝にすでに、

我兄子が振さけ見つゝ暎くらむ清き月夜に雲たなびきそ(古今六帖)

のごときものがあるが、多くは院政鎌倉時代に見え、この時代の語法の特徴と見るべきものである。

さら〳〵おぼしめしそ(大鏡)

よべもようべもよがれしき。悔過(けか)は來(き)たりとん〳〵目にみせそ(梁塵秘抄)

さま〴〵に契りしらるゝ身のうさにいとゞつらさを結びかためそ(とりかへばや)

更にその御事、後めたくおぼしめしそ(同)

ちりぬとも外へはやりそ色々の木の葉めぐらす谷の辻風(夫木和歌抄)

牛の子にふまるな庭のかたつむり角あればとて身をばたのみそ(同)

肝をつぶし給ひそ(源平盛衰記、十九)

父ノ御故ニ命ヲ失ワム事歎カセ給ソト母上ヲナクサメ給ヘハ(平家延慶本)

室町時代にも、「なーそ」は行はれ、稀には「そ」のみの場合もある。

火筋ナアツカウソ、火アイマチスナ、小刀ナツカウソ、手キルナト云ヤウナ事ソ(桃源抄三)

皇后ナラデハ、ナ入ツソト云フ心ソ(蒙求抄五)

サノミ我ヲナ笑ヒソヨト云ヒテ(古文眞寶抄)

サウナ云ソト云程ニ(三體詩抄四)

いとな泣いそ(天草本平家)

平家の方人をするとな思はせられそ(同)

「そ」のみを用ひたのは、

カマイテ人ニ見セソ、チト我トバカリ見フス(蒙求抄六)

の如きものである。

第九章　助詞

助詞をその職分から見ると、(一)文の成分の關係を規定するもの、(二)文全體の意味に關係するもの、の二大種類があることが分る。

開けばけふから審査が始まるといふ

に於て、「ば」「から」「が」「と」は、皆文の成分の關係を規定するもので、之を除けば、文の論理的關係は分らなくなる。卽ち體言の格を示すものと用言の法を示すものである。思想上に於て、一の觀念が他の觀念と如何なる關係に在るかを示すものである。

空には一片の雲だにもなし

の「は」「だに」「も」等は文の成分の存在に缺くべからざるものではない。文の意味を修飾するもので、之を除けば文の意味がかはるだけである。一を關係助詞と云ひ、他を修飾助詞と稱する。是らのほかに感動助詞がある。「や」「よ」「かな」「かし」の如きものである。余は大きくこの三類を分けて、わが國語の助詞の發生沿革を述べて見よう。

一　關係助詞　これは體言の格を示すものと、用言の法を示すものである。「の」「が」は體言に附屬して他語への係屬を示す助詞であるが、古代語には體言相互の結合をなすものとして、このほかに「つ」「な」がある。共に古いもので、奈良朝時代に既に用法が限られて居り、なかには之に連ねられてゐる體言が一個の單語のやうな觀を呈してゐるものもある。

とつ國　家つ子　まなこ　たなごゝろ

「の」「が」は又主格について現れるが、古代語に於けるものは、主語に附く場合も、むしろ主語の述語への係屬を明瞭にするのみのもので、國語では、主格でも目的格でも何らの助詞を附けず、語序が之を示すだけであつた。それ故に、

うはなりが肴こはさば(記)

さゞなみの國つ御神のうら荒びて(萬一)

といふ「が」「の」は、「梅の花」「梅が香」が體言の係屬を示す如く、用言への係屬を示すだけである。然し「の」「が」の間には、自ら差別が出來た。近い例が、「この人」「その人」「かの人」の如き用法を見ても、「こ」「そ」「か」と「人」とが單に結合されてゐるだけであるが、「が」は「わが國」「汝が名」「誰が袖」などの如く、多く人を現す體言につき、やゝ所有格に近い意味を發達させた。後世にいたる程この差別は深化して、平家物語では二個の體言を結びつけてある場合、第一の者が物の名であることは唯一個の例があるばかりであると、山田孝雄氏の「平家物語につきての研究」に示されてゐる。この關係は「正宗の刀」と「正宗が刀」の二つを比較して見ればよい。この結果「の」に由つて連絡される二つの體言は後のものが主となり、「が」によつて連結されるものは前のものが主になる。これが「が」が後に主格を示す助詞として發達して行つた所以で、「が」の場合はその標出されることが重く、自然「が」が「の」を凌いで、多く主格をあらはすものとして用ひられることになつたものであらう。中世以後「の」が多く係屬を示し、「が」が多く主格をあらはすものとなつた。

院政鎌倉時代に口頭語の上で、主語に「が」をつける習慣を生じ、記載語に及んで來た。

このさかひがゆゝしき大事にて侍る(定家卿消息)

愚息の小童が書きて候ふ(古今著聞集)

公行が詠まぬよしを申すなり(同)

然し始はかゝる語法は雅馴なものとは認められず、主語を示すに至つた新らしい用法を忌む保守的の感情は、體言への係屬をあらはす用法をも合せて、「が」の附く形一切を擯斥し去らうと

したのも面白い。顯昭の古今集注卷四に、

ハギガハナハ萩ノ花也、ノトイフ言葉ヲカトヨメルコトアリ、ムメノエヲムメガエトヨメリ、ムメノカヲムメガカトヨメリ、カリノネヲカリガネトヨミ、アシノチルヲアシガチルトヨミ云々　キヨミガセキヲモウルハシウイハバ、キヨミノセキトコソイフベケレ、コレラ大旨ハケタムコトバナリ、シヅガナドハサグルコトバトオボエタリ・オホヤケヲキミガヨトヨムコトハナメシトイフベケレド、ウヤマフコトバニヨミナラハシタリ

と云つてゐる。又宇治拾遺物語に、ある女房が爲家の侍佐多に「われが身は竹の林にあらねども、さたが衣をぬぎかくるかな」とふみにかいたのに、「さたのとこそいふべきに、かけまくも畏き守殿だに、またこそこゝらの年月ごろまだしか召され、などわ女がさたがといふべきことか」と罵つた話がある。

室町時代以後は「が」が主格、「の」が體言への係屬に用ひられる習慣が漸く確定した。

さればこそ鶏が此所に一つ這うたぞ(室町時代小唄集)

鳩どもが群り居る處に、鳶が來て掴み殺さうとの風情ぢやに由て(天草伊曾保)

異國にさるためしがある(天草平家)

「を」「に」「へ」「から」は古今を通じて大體同樣で、「を」は感動助詞であつたものが、次第に論理的關係を示す役目をつとめるやうになつたもの。「へ」は邊といふ名詞から出たもの。「と」は「それ」「されば」などの指示の意味のある「そ」「さ」と語根を同じくするもので(s—t の變化)、「とかく」「とある家」などの「と」とも關係があり、名稱・狀態・目標等を示す語に添へて「それ」と指示する爲に用ひるのが本義、引用の語句に「云々と云つた」と云ふのは、上の句をさして「さう云つた」と云ふこと。副詞を作る「さら〳〵と」「ぽんぽんと」の「と」も擬聲語を承けて「そのやうに」といふ意味で、漢語の鏗然、莞爾などの然・爾と同じわけである。それ故に同じ趣の語句を並べる時、その下に附く「と」は、いづれもその上の語句を「それ」と指すのであるから、指示されるものに附屬して、一つづゝ添うたものである。

夏と秋と行きかふ空の通路は(古今)

然るに物を列擧する場合、「筆と紙と墨」などいふやうになつたのは、「と」が接續の意味にかはり、最後の「と」を省くに至つたからで、江戸時代から今日に至つて通例のこととなつた。「から」は記紀等に見える「かれ」とも通じて、本來・理由などの意味を持つ名詞から來てゐる。

「より」は「から」と共に、動作の基點を示すことに於て、相通じて用ひられたが、今は「から」の方を多く用ひるやうになつた。「より」には、中古以前は或地點に於ける動作の進行を示す用

法があつた。

いにしへに戀ふる鳥かもゆづるはのみ井の上より鳴渡りゆく（萬、一）

小墾田の坂田の橋の崩れなば、桁より行かむな戀ひそ吾妹（同一一）

あたりよりだにな歩きそ（竹取）

彌生のつごもり方山を越えけるに、山川より花の流れけるをよめる（古今）

みなそこの月の上よりこぐ舟のさをにさはるは桂なるべし（土佐）

この門のまへよりしも渡るものか（蜻蛉）

垣の外より大路に笛ふきて吹く人あり（同）

前よりゆく水を初瀬川といふなりけり（源氏玉かつら）

「より」の古形に「よ」「ゆ」「ゆり」がある。奈良朝以前に用ひたものである。（註一）吉澤義則氏は同時代の文獻からその統計を取り、（一）「ゆ」「よ」の歌以外には用ひられず、（二）「より」の形が最も多く用ひられてゐる。（三）「ゆり」がもつとも少いといふ事實から、「ゆ」「よ」は「ゆり」「より」の略體で、語彙の豐富なことを要する韻文にのみ用ひられたもの、「ゆり」は衰滅に近づき、わづかに餘喘を保てるもの、「より」は當時全盛をきはめ、今日まで殘ることを豫言してゐると論ぜられた。

「ば」「と」「とも」「ど」「ども」は用言の法を示すものである。「ば」は順説條件を示し、「と」「とも」、「ど」「ども」は逆説條件を示す助詞。「と」「とも」は動詞の終止形、もしくは形容詞の未然形につき（助動詞は之に準ず。形容詞に似たものには未然形、その他は終止形）、まだ成立たない條件を假定するに用ひ、「ど」「ども」は動詞・形容詞、もしくは助動詞の已然形について、成立した條件をあらはすに使つた。

「とも」「ども」のかはりに、「も」といふ形を用ふることが鎌倉時代にあらはれ、室町時代以後多くなつた。

人はいみじくたけくも、力及ばぬことなり（愚管抄）

同じ御子豫王をこそ立てられしも、また捨てゝ自ら位に即き給ふ（神皇正統記）

室町時代に入りては、又「ても」といふ形が出來た。

啼クトモ更ニ歸リ得ルコトナケレバ啼テモ無用處也（中華若木詩抄上）

「が」「に」「を」は接續を意味し、また反對の結果を伴ふ條件を示すものに發達してゐるが、「を」は萬葉集にも見えるが、「に」は平安朝にはじまり、「が」は鎌倉時代に生じた。そのうち「を」は鎌倉時代より無くなり、「に」は江戸時代より「のに」となり、「が」は今日まで用ひられて

ゐる。いづれも格を示すものから轉じたもので、たとへば「月に叢雲」といへば、「月あるに叢雲あり」といふことが出てくる。それ故に、

いつしかと心もとながらせ給ひて、いそぎ參らせて御覽ずるに、めづらかなる兒の御かたちなり（源氏桐壺）

などは、全く接續を示すのみである。しかし一般に兩命題が並ぶ時は、對照の意味を伴ふから逆説的の意味はおのづから出てくる。

風のおと蟲の音につけても、物のみ悲しう思さるるに、弘徽殿には久しう上の御局にも參り給はず、月のおもしろきに、夜更くるまで遊をぞし給ふなる（源氏桐壺）

の如きは、逆説的の意味は、前後の文意から來るものであるが、

朝夕の言ぐさには、羽をならべ、枝をかはさむと契らせ給ひしに、かなはざりける命のほどぞ盡きせずうらめしき（源氏桐壺）

の如きものになると、明かに逆説的の意味を表すものとして發達して來たことが分る。いづれも連體形を受けてゐることは、もとの格助詞の性質を傳へてゐるものである。江戸時代も後になつて出來た「のに」になると、全く逆説的の意味を明かにあらはす助詞で、

夜なべに繼いでおけばさば〳〵布子も着られますのに（浮世風呂）

中を見てゐたつて始らねへ事だのに（花暦八笑人）

「が」ももとは體言の格を示す助詞から轉じたもので、

いとやんごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり（源氏桐壺）

の如きものを、法を示す助詞と解するならば、無論誤であるが、

いたうそびやぎたまへりしが、少しなりあふ程になり給ひにけり（源氏松風）

の如きものを見れば、法を示す助詞への轉義の經過は想像される。はじめは單に二つの命題を並べるものに過ぎないが、近代語になると、多く前後背反の意味を以てあらはれてくる。

頼盛暫く支へたるが門より外に追ひ出さる（平治）

「を」も同樣に、本義は單に接續である。

くはしく御有樣も奏し侍らまほしきを、待ちおはしますらむを、夜更け侍りぬべし（源氏桐壺）

しかるに第二次的に逆説的の用法を生じ、近代語では「ものを」の形に於てはつきり現れてゐる。

さうでなくば、その贋物いたし方がござるものを、さて〳〵困つたものだ（膝栗毛）

二　修飾助詞　修飾助詞の「は」は、事物を取出して之を標示し、「も」は物を擧示して他のもの

に同列におく意味、古今を通じて殆ど變らない。

「だに」「すら」「さへ」は相通ずるところある助詞。「すら」はもつとも古いもので、一端を擧げて他端を推せしめる意味を表す。平安朝時代には既に衰滅に近づいて、「だに」が之にかはることが多く、

そのあたりの垣にも家の外にも居る人だに容易く見まじきものを(竹取)
赫映姫、光やあると見るに堂ばかりの光だになし(同)
はかなき事だにかくこそ侍れ(源氏帚木)

の如く用ひてゐる。「すら」は平安朝には殆ど歌にばかり見えて用例も少いのは、一般に用ひられなくなつた證據である。院政鎌倉時代には「そら」といふ形にかはつた。

兼テ仰セ有ラムニテソラ躬恒貫之ガ讀タラム樣ニハ何デカ有ラム(今昔廿四)
只有ツルソラ打憑テ遙ニ來タル夫ハ去テ(同、廿四)
畜生ソラ哀レニ爲ル人ニハ尾不レ振ヌ樣ヤハ候フ(同、廿六)
只ニ候ツル時ソラ御顧ノ厚ク候ヘハ(同、廿六)
然レハ蜂ソラ物ノ恩ハ知ケリ(同、廿九)
恒河沙ソラナヲハカリナシ(法華百坐)

又心ナキ野邊ノ雉ソラ子ヲ思故ニ野火ノ爲ニ身ヲホロボストカヤ(平家延慶本)

「すら」といふ形は山田孝雄氏の統計によるに、延慶本平家に唯二つの例があるばかりで、口頭語では恐らく當時みな「そら」と云つたものだらう。しかも「そら」も用法が局限し、主格に附屬するものばかりであることは、後に亡びる前兆を示してゐるものであらう。傳康賴自筆寶物集には、「すら」はなく、「そら」のみ四個、內一個は主格につくものではない。室町時代にもなほ用ひられた。

トテモ殺サハ世子ノ傅テアツタカ、無レ罪殺サル、ヲソラ不知テ居タソ(史記抄三)

「だに」は本來

家の人ども物をだに言はむとて(竹取)
一文字をだに知らぬ者しが足は十文字にふみてぞ遊ぶ(土佐)
それを見てだに歸りなむ(竹取)
こゝにも心にもあらでかくまかるに昇らむをだに見送りたまへ(同)
命だに心にかなふものならば何かわかれの悲しからまし(古今)

の如く、最小限を示す助詞である。この用法は室町時代にも、

我ハ昭陽宮ヘ近キダニ、エセヌホドニゾ(三體詩法二)

功成テタニアラバ、五湖ヘ向テ隠居セサルソ（錦繡段抄五）
向ハ何トケガレトマヽヨ、我ダニ道ヲ守ラハト云ハヨイソ（蒙求抄五）
張ってだにござるならば、よこしませうが（狂言ひめ糊）

などあつて、引續きなほ生きてはゐるが、又これを「さへ」で代用してゐること今日の用法の如きものが多くなつた。「だに」は「すら」に比べれば、生命が長かつたけれど、その後間もなく用ひられなくなつた。「だに」は「すら」を兼ねて意義の擴張を行ふと共に、「だに」に「も」が附いて約つた「だも」を生じた。

夢にだもあふと見るこそうれしけれ、殘りのたのみ少なけれども（和泉式部集）

これは室町時代にも次の如く見える。

周公ヲ夢ニダモ見ザルトアルホド（蒙求抄五）
名ヲ求ムルダモ、生死ヲ忘ル、ゾ（莊子抄二）

「さへ」は一の物事の上に更に他の物事を添へる意味を持つてゐるもので、この用法は、

世になく清らなる男御子さへ生れ給ひぬ（源氏桐壺）
いとあはれにかなしく心ふかきことかなと涙をさへおとし侍りし（同帚木）

などに見るやうに、古今に通じてゐるが、室町時代には「すら」や「だに」の用法を代つてするやうになつた。

花盛ナルトキサヘ見ル人モナクシテサビシキニ（中華若木下）
彼の鶏さへないならばこれこそ拂曉には起されまじいものと思うて（天草本伊曾保）

「ぞ」は語源から云へば、指示の意味があつて、代名詞の「そ」「それ」等と語根を同じうするものである。それと強く指し示す働をもつてゐて、紀記の時代には「そ」とも云つた。古事記も日本書紀も、「そ」「ぞ」相半ばしてゐる。「そ」は平安朝以後は、「誰そ」「なーそ」などの形に名殘をとゞめた。

「ぞ」がある時は、文の結びは連體形とすることが、奈良朝から平安朝までの一般の慣習であつたが、院政鎌倉時代以後、終止形連體形が同形となつた結果、次第にこの係結の呼應の失はれた事は前に述べたが、室町時代の抄物に、

今度七國ノ亂イカヾアルベシ（中華若木抄上）
イカホド面白カルベシ（錦繡段鈔四）
サレハコソ梅花樹下ニハ有レ墓ランナリ（同五）
サコソ面白クヲモハレントゾ（三體家詩三ノ三）

など記してゐるのは、全般に係結の意識が衰へてゐたことを示してゐるものを云つてよい。後には、

破レタソ程ニ（錦繡段抄二）

ともかくもなつたぞならば（天草本平家）

何事をかきゝわきまへられうぞなれども（同）

の如く、單に意味をつよめる用を成すものになつた。

「なむ」「なも」は「ぞ」に似てやゝ婉曲な指示の助詞。散文に多く、歌につかふことは稀である。「なも」が古く、奈良朝時代に榮えたもので、平安朝初期に「なむ」となつた。これが係となる時は、文の結びを連體形をもつてすることは、「ぞ」と同じである。鎌倉時代には衰へて、近代語には使はれなくなつた。

何はなも戀ひずありとはあらねども、うたて此の頃戀のしげきに（萬一二）

袂よりはなれて玉をつゝまめや是なむそれとうつせ見むかし（古今）

つれ〴〵になにか涙のながるらむ人なむわれを思ふともなく（古今六帖）

などは、「なも」「なむ」を歌に用ひた例であるが、すべて結を轉じたものか、省略のある用法で、連體形で結んだものは一つもない。

「こそ」は「ぞ」よりも一層強く物を指示する助詞で、「こ」も「そ」も語源は指示語。「それ」「これ」と同じ語源から來てゐる。多くの部類の中から、そのもの一つを拔き出して區別する意味を持つてゐる。「こそ」の係を已然形で結ぶ習慣は、他の係結に比べて最も後まで殘り、室町時代にも大體は守られてゐるが亂れてゐるものも少くない。動詞形容詞の例はそれ〴〵その條に擧げたから、こゝにはその他の品詞の現れてゐる例をあげて見る。

カウシテコソ天下ハ治タレソ（史記抄四）

詮する所は便宜に窺うでこそあらうずれ（天草本平家）

の如きは守られてゐるもの、又、

アノ下ニコソ吾親ハ居ルラント（中華若木中）

折節ハタヲコソヲラレツラウ、ハラリトキツタゾ（蒙求抄四）

竹雲ノ木ハ無點ナホドニ、ゴテコソ候ラウゾ（同四）

の如きは失はれてゐる者だが、かゝる已然形を失つてゐる者の上から、一般に「こそ」の係結も亡びて行つたのだらう。「らむ」との呼應に於て、「こそ」の結の無くなつて居ることが目につく

が、その起源は古いらしい。

藥草ニコソハ候ラム(法華百坐)

これは院政時代の例である。

鎌倉時代から室町時代にかけて、「こさんなれ」「ござんなれ」といふ特殊の連語がある。「こさんなれ」は「こそあるなれ」、「ござんなれ」は「にこそあるなれ」の約つたものである。「ごさんめれ」といふ同趣の連語もある。

さては一家郎等ござんなれ(保元)

敵の惡源太にては非ずして、よき身方ござんなれ(同)

サテハ惜ムゴザンナレ(平家四)

は、「ござんなれ」。又

見ルベキ程ノ事ハ見ツ今ハカウコサンナレトテ被立タリケルニ(延慶本平家)

世の中は今はかうこさんなれ(平治一)

は、「こさんなれ」。これを一個の感動詞と見ることの誤を説かれた松尾捨次郎氏(註二)の説は動かないところである。又

内カラノ御使ニハアラジ、平家ノ知リテ人遣ハシタルゴザンナレ(延慶本平家)

胡氏ハ孝文莊襄ノチヤツ〳〵ト死ナレタハ、呂不韋カ我子ヲ蚤ク立ントテ、弑シタコサンメレト云タソ(史記抄四)

其味ノニヤウタハ、アハレシタイゴサンメレ(山谷詩抄、十一)

アワ京人ゴザンメレト(三體詩法抄四)

は、「ごさんめれ」の例である。

「し」は「そ」「そ」と語源を同じくして、やはりそれと指示する意味の助詞であつたが、既に中古時代から「そ」や「こそ」と違つて用法が局限せられてゐる。當時衰滅に近づいてゐたものらしく、王朝時代に出來た係結の約束も、この上には發達しなかつた。

はたゝぎも此しよろし(記)

わぎも子がおもへりしくし面影に見ゆ(萬葉四)

醉泣するしまさりたるらし(同三)

の如き奈良朝時代の用法を見れば、古くは「ぞ」と同じに用ひられてゐたことを察することができる。平安朝時代には條件の假定もしくは確定の條件に用ひられて、

名にしおはゞいざ言問はむ(伊勢)

もみぢばのいろをしそへてながるればあさくも見えず山川の水(拾遺)

うとき人にしあらされば家とうじに盃さゝせて女のさうぞくかづく(伊勢)

の如き場合のほかは、「しぞ」「しも」「しか」「しこそ」などと他の助詞と結合して、

はる〳〵きぬる旅をしぞおもふ(古今)

あまた見しとよの御幌のもろ人の君しも物を思はするかな(拾遺)

新しき年のはじめにかくしこそ千年をかねてたのしきをつめ(古今)

たれしかもとめて折りつる春霞立ちかくすらむ山のさくらを(古今)

けふよりは今こん年のきのふをぞいつしかとのみ待ちわたるべき(古今)

などと用ひ、いよ〳〵用法は局限して、遂に「折しも」「必ずしも」「いつしか」等、一定の熟語の上にのみ殘つて行つた。院政鎌倉時代以後榮えた「ばし」も、この「し」の他の助詞と結合したもので、その源は平安朝に在る。

心も知らぬ人を宿したてまつりてかまばしも引きぬかれなば、いかにすべきぞと思ひてえ寢でまはりありくぞかし(更級)

「ばし」は「をばしも」が省かれたもので、初めは目的格にのみ用ひたものだが、後には必ずしもそれに限らない。

むくろに手ばし負ひたりけるかと問ふに(古今著聞集)

人ニ頭バシ切ラレウトテ不覺ノ人哉(平家延慶本)

など目的格であるが、

能々宮仕奉レ、相構テ御心ニバシ違ナ、ド(平家)

知らざる者の馴々しく斯樣に申すとばし思ひ給ふな(曾我)

晉ノ嵇康劉伶ト杜ヲ一樣ニバシミルナ(錦繡段抄三)

我ハ李廣ガ孫デソウナント、ハシ云ナ(同三)

心タテハシ、一ツアルカ、用レ心ト、シヤケヲ用タカ、面白カゾ(莊子抄二)

金牛ノ振舞ハ顚狂テハシアランカ又提唱建立テハシアランカト也(碧巖抄八)

など、その他の場合にもついて、之をつよめる役目をしてゐるのである。然し室町時代の「ばし」は大體疑問か禁止にのみ用ひ對話に限られてゐる。江戸時代にも、

少將の子とある證據ばしあるか(傾城隅田川)

必ず人ばし恨むるな(松風村雨東帶鑑)

必ず疑ふてばし下さるなや(三十石艪始)

など、同じ用法に於て用ひられてゐるが、次第にすたれて、今日は佐賀方言・鹿兒島方言などに、わづかに疑問の場合に殘つてゐるばかりである。

「や」「か」は奈良朝時代より平安朝時代に通じて、文の中間と終止とに用ひられ、中間に在る場合には之を用言助動詞の連體形にて結び、終にある場合には「や」は終止、「か」は連體形を受ける習慣であつた。又上に疑問の語のある時には、「か」を用ひ、「や」を用ひないと云ふことも堅く守られた。しかるに鎌倉中期以後には、

わづかにまみゆる心地するを、あけにけるやと思ひて（調度歌合）（註三）

寂光院の北坊にて見侍る、みさせ給ひしや、いまたし（頓阿高野日記）

佛果の障は、因位の智を以て斷するやととふ（藤原基綱くらかさねの記）

など、「や」も連體形を受けるやうになり、又疑問の詞の下にも用ひるやうになつた。

姫君も何事にやと思ひ給へり（住吉物語）

此上可レ爲何様哉由（東鑑三）

人難モアリ災モキタラン時、神佛ヲウラムル事アルベカラズ、イカナル方便ニヤアラン（沙石集元和活字）

コハ如何ニシテカヽル佛ニ有ルヤト思廻ラスル程ニ（沙石集天文本慶長本）

「や」は鎌倉時代を以て終を告げ、唯「やら」の形にのみ殘り、「か」は文の終止にばかり用ひられて今日に至つてゐる。

「やら」は「にやあらん」から來たもので、院政鎌倉時代に「やらん」となつてゐるが、

女ニハイカニスルコトヤラント心モエレド（今昔二九）

今度ハ如何候ツルヤラン（平家、四）

コハ夢ヤラントゾ、被レ驚ケル（同、五）

其氣ニテヤラン、是ハイタチニヲヅル（吾妻鏡）

佛性すなはち如來なりとおほせられて候やらん（親鸞未燈抄）

又「やらう」となり、

多イヤラウ、少イヤラウ、凡七日八日間ハハタト續イテ（平家、五）

これが又「やら」となり、室町時代には、「やらう」と相通じて用ひてゐる。

肩吾モ連叔モナンタル者ヤラソ（莊子抄一）

尉ハウツノ言ヤラウ、イノ音ヤラウシラヌソ（蒙求抄、二）

龍ノ去ツタト云フハ、何ノ書ニアルヤラウ知ラヌテ候ゾ（同五）

單に疑問の「か」と同じ意味にも使つた。

トコヤラフデ、トロ〳〵ト震フタル雷ソ（碧巖抄五）

また、「やらん」と「やらう」、「やらう」と「やら」とを並べても用ひてゐる。

煙雨ノ中トハ、春カスミノ煙ヤラン、雨ヤラウノ如クナルヲ云ソ（三體詩法、一）

ナニサマ節去ヲ知ルヤラフ不知ヤライツレニ折殘ス枝カハヤカハル也(湯山千句)

これが單に並列をあらはすものとして今日に至つてゐる。室町時代の例

紅ナ物ハ桃ヤラ杏ヤラニ白ハ梨ヤラ李ヤラフ烟雨中看紅白(湯山千句)

三　感動助詞　感動助詞は今日に比べて、古代語に豐富に使はれてゐることが、われ〳〵の注意を惹く。今日は命令形につく「ろ」「よ」「い」感動をあらはす「よ」「な」「ね」「は」「ぞ」「ぜ」等があるのみである。

奈良朝の文獻に見えるものは、「や」「よ」「を」「な」「ね」「に」「る」「が」「ろ」「ら」「か」「は」などである。

「や」は呼格について、「八千矛の神の命や」などと云ふ。これは今日にも殘つてゐる。「石見の高角山の」の如きものは、單なる感動である。疑問の「や」はこれから出た。「よ」は今日も廣くつかふが、奈良朝に於ては多く「も」と連結してゐる。「もがもよ」といふやうな連結もある。

吾はもよ(記)　籠もよみこもち(萬一)　水にもがもよ(萬一四)

「よ」は感動の場合は、「や」と同樣であるが、「よ」は命令形を助ける助詞として發達したことが特徴である。命令形と離るべからざる感を與へてゐる。しかし、既に述べたやうに本來は命令と「よ」とは關係がなかつた。四段活用には「よ」を附けず、その他には「よ」を附けると云ふのは中古以後馴致した一種の習慣に過ぎない。加變の如きは「よ」を附けない方が本體である。之に反して四段でも「よ」を附けることがある。四段につく「よ」は感動助詞で、その他につくのは活用形のうちであると云ふのは、勿論誤である。上二・上一が早くから殆ど凡て「よ」を附けるやうになつたのは、これらの活用は未然・連用・命令の三つまで同形であるからであらう。

「を」はもつとも古い感動助詞である。

かゝなべて夜には九夜日には十日を(記)

八重垣つくるその八重垣を(同)

などその例である。「春を淺み」「風をいたみ」などの「を」もその一種である。目的格につく「を」はこの感動助詞から出たものである。

「な」は文の完結したものにつく時、單なる感動をあらはすが、動詞の未然形につく時、願望の意味を生じてゐる。

「ね」は「な」と通ずるものである。「に」は、その變化であらう。

吾に匂はに妹に示さむ(萬九)

住吉の出見の濱の柴な刈りそに(萬七)

「なむ」も同じ性質のものである。その古い形に「なも」がある。「な」と同じく動詞の未然形につく。

ほとゝぎすなほも鳴かなむ(萬二〇)

山の端逃げて入れずもあらなむ(古今)

「なむ」が他の動作に對する願望をあらはすのに對して、自己の動作に關する願望をあらはす助詞が、「ばや」であるが、これは平安朝に出來たものである。その例、

なほ人づてならで聞え知らせばや(源氏、若紫)

室町時代に、次の如く否定にかはると共に、亡びた。

報(テヘ)レ本アラハヤソ(桃源抄一)

家ニ錢モアラハ、買テノマンズルコトナレドモ、ソレモアラバヤ、(中華若木、中)

我ハ文ヲ、コトツカツテ、屆(トヾク)ル者デモ、アラバヤト云(蒙求抄一〇)

「ゑ」は多く形容詞の終止形につき、「やし」と連結して、

よしゑやし浦はなくとも(萬二)

となることがある。

「が」は願望をあらはし、「もが」「もがも」と云ふ連結をなした。

今も見てしが妹が姿を(萬八)

なでしこのその花にもが(同三)

常にもがもな常少女にて(同一)

平安朝以後には、「がな」と云ふ連結が出來て、

知りたる人もがな(枕)

これは室町時代にもなほ

湊の川の鹽が引けがな(閑吟集)

などその例があるが、既にこの時代に語性を變じて修飾助詞として表れてゐる。

猶よからん敵がな組んで今一人首とらんと思ひて(源平盛衰記)

なにがな進上したいと思へ共(昨日はけふの物語)

ナニヲカナマイラセウトスレトモ、何モナイホトニ(桃源抄二)

「ろ」は奈良朝時代、上國の言語では、「大君ろかも」「ともしきろかも」等、單純な感動にのみ用ひるが、東歌には

あどせろとかもあやにかなしき(萬一四)

白雲の絶えにし妹をあぜせろと心に乘りてこゝばかなしけ(萬一四)

とあつて、關東方言に於ける命令形附屬の「ろ」の起源を示してゐる。

「ら」は

兒をら妻をらおきて(萬二〇)

麻苧らを桶にふさゝに績まずとも(同)

などあるが、これが後の複數の接尾語の起源をなしてゐるであらう。

「は」「も」は一方に修飾助詞の起源を成し、感動助詞としては、「はや」「はも」「もぞ」「もが」などの連結としても現れてゐる。

「か」はしば〳〵「かも」「かな」と連結し、「かも」は奈良朝時代に榮えたが、平安朝時代に「かな」を生ずると共に衰へ、古今集以後の勅撰集には跡を絶つた。藤原公任は、

かも、らしなどのふるきことばなどはつねに讀まじ(新撰髓腦)

と云つてゐる。殊更に用ひたものは、古歌の模倣である。このほかに、奈良朝には「よし」「やし」の如きものもある。

平安朝に於て、「ゐ」「に」「ね」「ろ」「ら」「よし」「やし」等皆亡び、「が」は「もが」「もがな」など云ふ連結をなし、「か」から「かな」が出來、又新しく生じたものに「ばや」の外に「かし」がある。「かな」「かし」は室町時代尙用ひられたが、その後は亡びた。

吾を助けられいかし(天草伊曾保)

一曲きかせられいかし(同)

憎い奴が根性骨かな、さては爲うことがあるぞ(同)

近代語では、係の助詞の變化した「ぞ」が出來、それが變化して「ぜ」と云ふこともある。「よ」からは「い」ができ、「な」からは、「なう」「のう」「の」「ねえ」「ね」が出來た。「な」「よ」「や」「ろ」は古代語から引ついでゐる。「は」も同じ性質のものだが、「わ」とかく習慣となり、それから出來たものに「わい」がある。

註

(一) 吉澤義則氏、國語國文の研究。

(二) 松尾捨次郎氏、國文法論纂。

(三) 現行普通文法改定案調査報告。

第十章　文

文とは統覺によつて統一された意識内容の表出であるが、文法上、文として取扱はれるものは、具體的の言語に於けるものよりも、範圍に於て狹い。實際生活に於ては、「泥棒」と叫んでも、はつきり何を意味するか分るし、食卓上の食鹽を取つて貰ふとき、「それを」と云つても表出の目的を達し、「ひとりで入らつしやいましたか」と云ふ問に對して、「父と一緒に」と云ふだけの答も、普通に經驗するところである。これが具體的の言語の場合に表出の目的を達してゐるのは、實際の環境が之を助け、又言語以外の表出運動、たとへば目の運動、話手の顏の表情等が意志表示を補ふからである。文法上の文は、觀念的に考へられた場合の文で、從つて具體的の言語に於ては、立派に文の役目を果してゐるものも、文として取扱はれないことが多い。さきの「泥棒」「それを」「父と一緒に」と云ふやうな表出は、一旦その環境や、言語を助ける他の表出運動と切離して、觀念的に考へられた場合には、文としての價値を失ひ、單に文の一斷片となつてしまふ。

文法上の文は、談話の連續の上に、一個の單位として、完結してゐなければならぬ。文は內面的には、意識內容の統一であり、外形的には何らか形式上の段落を有してゐる。「花が咲いた」のやうに、談話に述語の終止形が現れるとき、一個の文として取扱はれるのは、一個の統覺的聯合の言語的表出として、音聲の一團が常に經驗され、之が繰返されることにより、つひに之を以て談話に一段落を感じ、談話の一單位といふ觀念を生ずるやうになつたからである。勿論「咲いた」といふのが、「咲いた時」と云ふやうな連結を取つて現れることはあるが、かゝる時は、具體的の言語としても、一個の統覺的聯合の表出として、それを以て完結したものと經驗することは、普通ではないからである。用言、活用連語等が終止形を取る時は、それ故に談話の一單位として感ずる。これが文法上の文である。吾人の言語を文字に記すときは、一切の環境、他の表出運動から切離されてしまふが、觀念的に一段落となつた文は、常に一個のまとまつた單位と云ふ意識を作り上げてゐる。これは命令文の場合の「行け」と云ふ如き時も同樣である。これはこの種の文の性質上、命令形があらはれ、それだけで實際の談話の際に、一個の段落を附し、まとまつた者として聞いたからである。之に反して、「花が」と云ふのは、特定の場合には、まとまつた談話の單位として聞いたこともあるが、「花が咲いた」と云ふ場合も聞くし又その方がむしろ「花が」と云ふよりも多く經驗してゐるから、具體的の談話から切離した場合には、完結した談話の單位としての意識は伴はないのである。それ故に觀念上に於ては、かゝるものは一個の獨立の文と感じないし、之を文字にあらはしては、單獨の場合は、一個の文とはしないのである。かくの如くして、文法上では、「花が」とか「父と一緒に」と云ふやうなものは、文の斷片であり、「今日は休み」と云ふやうなのは、文の省略されたものである。省略されたものは、現されてゐるだけの言語によつて文の內容が認められるものである。

すべて言語にあらはれるものと、現れずして推知されるものとは別である。文は言語の形式である。文を論ずるには、たゞそれの言語としての性質を以てしなければならぬ。言語としての文は、音聲にあらはれたものに就いて云はれる。推察によりて附加されたり、論理的にあとから解釋されたものによつて定めることは出來ない。

かう見て來ると、國語の文と云へば、常に用言もしくは活用連語の終止形(命令文の場合は命令形、要するに文の完結形式)が述語となり、述語たる用言のあらはす屬性の主體、もしくは客體を現す主語・客語、若しくは修飾語がその上に位してゐるわけである。この法則は、古今を貫いてかはらない。

然るに之に對して、「まあ、きれいな花」と云ふやうな述語のない文がある。文は主觀的特徴によつて、云ひ換へれば、感情的要素の加はることによつて、種々の形を呈し、感情的要素の大小は、その形の特徴を決定してゐる。客觀的に文が持つてゐる表象から見るならば、意識の統覺的統一たることに於ては、すべて一であるが、それは統覺的聯合のまゝで現されずして隨意的の再表出の形を取つてゐるものである。反射的の叫びごゑは言語ではない。音聲を象徴として、感情欲求警告等の意味を隨意的に表出した時、はじめて文となる。これは感嘆文と云つてよい。

又古代語に於て、從つて口語でも記載語に於ては、

うつくしき月よ
あはれの事や（源氏帚木）

の如き形がある。口頭語の場合のやうに、感動詞は附かないでも、「よ」「や」「かな」などの感動助詞は、よくこの種の感情をあらはす文を作る目的を達してゐる。

「まあ、ひどい雨だ」「おや、眞くらだ」と云ふやうな文、又實際の談話では、一種の音調をつけることによつて、感動詞をつけないでも、一種の感情をあらはすことが出來るが、形は平叙文と少しも違はないから、今述べた感嘆文と一緒にすることは出來ない。平叙文が感嘆文の代用をしてゐるだけで、代用はどこまでも代用である。われ〳〵の感情を表すにも、次第にかくの如く平叙文の形を取るやうになつたが、「まあ、ひどい雨」「おや、眞くら」と云ふやうな何ら述語を持つてゐないものゝ方が、感情を含むことは大きく、一層原始的な文である。往々にしてかういふ文を解釋するにも、論理と文法とが混同され、それに何らか述語の形を考へる傾があるが、これを省略と見て、述語を考へることは、この種の文に内在する感情を滅却せしむることは勿論、事實に於て、「まあ、ひどい雨」と云ふとき、「降つてゐる」と云ふ動詞、「きれいな花」と云ふ時、「咲いてゐる」と云ふ動詞は、少しも念頭にはなく、聞く人の頭にも、この體言の形そのまゝで、その語られる意味が完全なものとして現れ、思想に於ても、發表に於ても、何ら省かれたもの、不完全なものとして感ぜられることはない。感嘆文は、多くの國語に於て、體言的性質を持つた文としてあらはれ、すべての點に於て、原始的な文の形式を示してゐる。特に律語に於ては、平叙文の形であらはし得るものも、好んでこの感嘆文の形を取る。わが國語に於ても、感嘆文は、古代に於て豐富で、長く和歌俳句には定形となつてゐる。

人ごとに折りかざしつゝ遊べどもいやめづらしき梅の花かも（萬五）

露しげきむぐらの宿にいにしへの秋にかはらぬ虫のこゑかな(源氏横笛)
小笹ふくしづのまろやのかりの戸を明方になく時鳥かな(新古今)
むすぶよりはや齒にひゞく清水かな(芭蕉)

次の如きものもある。

ぬばたまの夜霧の立ちておぼゝしく照れる月夜の見れば かなしさ(萬六)
秋はぎのしがらみふせて鳴く鹿のめには見えずて聲のさやけさ(古今)
つゝじ咲いて石うつしたる嬉しさよ(蕪村)

これらは散文にもある。

いとむねいたきわざかな(蜻蛉)
春宮にも久しうまゐらぬおぼつかなさ(源氏葵)

律語では、又次の如き形がある。

やすみしゝわが大君の遊ばしゝ猪の病猪のうたき畏みわが逃げのぼりし荒丘(あらを)の榛の木の枝(記)
神無月時雨もいまだ降らなくにかねてうつろふ神無備の森(古今)
梅の花あかぬ色香も昔にておなじ形見の春の夜の月(新古今)

これは具體的の談話に於て、「ひどい雨」「きれいな月」と云ふやうな何ら感動をあらはす品詞

がなくても、音調によつて感動をあらはすのと同じ性質のものである。かの歌に見る文は、これが一種の形式として固定したものに外ならぬ。

吾々の口頭語に於ける文の形式は、比較的簡單である。われ〳〵の言語が、日常の實用にばかり生きてゐたならば、文の形式も憐むべき貧弱なものに終始したらう。言語が音調の藝術、すなはち音樂と結びつくことに由つて、文の形式は豐富になつた。言語は表象や概念を表出するのみならず、それと結びつく感情の表出である。記憶に殘つてゐる過去の表象を呼起し之を結合して、われ〳〵の心の前に幻想の世界を展開するのが藝術である。之がためには、表象は明瞭に、感情は強烈でなければならぬ。これは低級な日常語のよくする所でない。こゝに感情の直接の表現たる音調の藝術の助を借らなければならなかつた。

然し乍ら、感情と表象とは常に同等でないとともに、この音調の藝術と言語とは、常に同じ強さで現れることはない。表象の世界は感情の世界よりも勢力を擴張し、音樂の世界はだんだん狹くなり、遂に言語と袂を分つた。まへには謠でうたはれたものが、今度は言語だけで作られ、たゞ音樂から出て、音樂と交渉のある韻律によつて助けられるだけである。かくして歌が成立つた。言語の藝術として、音調の藝術より新しいものである。この詩に於ける韻律が除か

れて、又散文は發達した。

この外に古代語には、また願望をあらはす一種の感嘆文がある。

老いす死なずの藥もがな（古今）

いぶせう思ひ給へらるゝ事をも明らめ侍りにしがな（源氏賢木）

一は體言が「も」を介して、願望をあらはす助詞「が」を伴ふもの、他は「明らめ侍りにし」を主分とする連語を體言化して、「がな」が附いたものである。

すべて感情は一般に分解できないものであるから、之に伴ふ表象をたゞ體言の形で投出したものが感嘆文一般の特徴で、あるものは、この通性に從つて平叙文の形をそなへる文全體を體言的に結集して、感嘆文を作つてゐるものもある。この種の文は近代語には全く無くなつてゐる。

以上見る如く、すべて感嘆文は體言を以て終り、もしくは體言に準ずる形を以て結集せられたものであることを知れば、

もゝしきの大宮人の熟田津に船乘しけむ年の知らなく（萬三）

磯毎に海人の釣舟泊てにけりわが舟泊てむ沖の知らなく（萬一七）

あまの川あしぬれわたり君が手もいまだまかねば夜のふけぬらく（萬一〇）

鳥といふ大をそ鳥の言をのみ共にといひて先立ち去ぬる（靈異記）

ちると見てあるべきものを梅の花うたて匂の袖にとまれる（古今）

わが宿の梅の立枝や見えつらむ思の外に君が來ませる（拾遺）

の如きものも、同じ性質の者と分る。「知らなく」「ふけぬらく」は、奈良朝時代の名詞法であるから、感嘆文といつて差支ない。その他は、もはや感嘆文とはいへないけれども、感嘆文の性質を多分にもつてゐるから、述語が連體形をとり、體言に準ぜられて、助詞「の」「が」を伴ふ體言に連つてゐるのである。萩原廣道が「てにをは係辭辨」で、玉の緒の「の」の係を除いたのは、この意味で正しい。

次の如きものは、又これが類推して出來て來たもので、「詞の玉緒」に變格としてあるが、かくの如き特殊の形を呈してゐるのは、全く感嘆文を母胎として出來たからである。

あひにあひて物思ふころのわが袖にやどる月さへぬるゝ顔なる（古今）

たにの戸をとぢや果てつる鶯のまつに音せで春も暮れぬる（拾遺）

かしまなるつくまの神のつくづくとわが身ひとつに戀をつみつる（同）

ひぐらしの山路をくらみさ夜更けてこの末ごとに紅葉てらせる（後撰）

今日の「花がさく」と云ふ平叙文一般の形も、その由來するところは、感嘆文にあると云つてよい。近代語に於て、連體形・終止形の區別が失はれたのと並んで、主語を助詞を以て明示する要求が大きくなるに從ひ、この形がかの形を同化するやうになつたと解釋せざるを得ない。

第十一章　文の成分

文は一個の單語から成ることもあるが、多くは二個以上の單語の連結で出來てゐる。二個以上の單語の連結は、相依つて一個の品詞と同じ取扱を成し得るものがある。「白い雪」。これは全體として、單に「雪」と云ふのと、同じ資格で取扱はれる。之を同極關係と稱ける。

同極關係には、同格關係と從屬關係とある。前者に於ては、「紙及び墨」のやうに、相伴つて一個の名詞と同じ取扱を受ける。單に並列することもある。「筆、墨、紙」と云ふ類である。又「且遊び、且學ぶ」「あたらものに言ひおもふ」(落窪)、この子おほきくさとくかしこし(宇津保)の如きは、用言の同格關係による連結である。

從屬關係に於て、その成分は、主分と從分とから成る。「青い松」と云ふ連結は、「青い」が從分、「松」が主分である。その從分が、又主分と從分とから成ることがある。「いと青き松」と云へば、「いと青き」が從分で、松が主分であるが、「いと青き」は、又「いと」と云ふ從分と「青き」と云ふ主分との連結である。同時に又主分が主分と從分とから成ることもある。「かの青き松」

と云へば「かの」が從分、「青き松」が主分であるが、主分「青き松」は「青き」と云ふ從分と「松」と云ふ主分から成つてゐる。

かくして、單語の連結がすべて同極關係から成つてゐる場合は、その連結は、その中の究極の主分(總主分)と同一の資格に歸する。もし同極連結なる時は、二個以上の單語が總主分たることがある。「かの青き松とこの白き砂」と云へば、「松」及び「砂」、「高く飛び、いと緩かに舞ふ」と云へば、「飛び」と「舞ふ」とが總主分である。

我舟を水に浮ぶ

これは主語・客語と述語とから成つてゐるが、これも從屬關係である。「我」は從分、「舟を水に浮ぶ」は主分、「舟を水に浮ぶ」は「水に浮ぶ」が主分、「舟を」が從分、更に「水に浮ぶ」は「浮ぶ」が主分、「水に」が從分であつて、「浮ぶ」は「我舟を水に浮ぶ」と云ふ全體の連結を代表する總主分である。「雪は白い」と云ふやうな文は之と違ふ。

「雪は白い」と云ふ文では、雪はやはり主語であるが、「は」といふ助詞の爲に、「雪」は述語に從屬せず、「雪は」は「白い」に對立する。「あの人が通る」は從屬關係であるが、「あの人は通る」がさうでないことは、「あの人が通るのを見た」と「あの人は通るのを見た」とを比較せよ。「あの人は通るのを見た」は「あの人」は「通る」に從屬せずして、何人かゞ通るのを「あの人」は見たと云ふことになる。それ故に、「雪は白い」の如きものは、對極關係と稱する。「通る」が準體言であれば、「あの人が」は從屬關係であるから、「あの人が通る」のも同じ資格として取扱はれるが、「あの人は通るの」は一成分としては取扱はれない。「雨が降る時」「雨が降るけれども」「雨が降るのに」と同じく、「雨が降れば」と云はれるが、「雨は降れば」とは云はれない。對極關係は他と連結するとき、種々の制限がある。

對極關係は判斷に於ける主辭と賓辭との對立である。「あの人は鷄に餌をやつてゐる」と、「あの人が鷄に餌をやつてゐる」とは違ふ。前者は判斷であるが、後者は表象である。我々は單に物を見たり聞いたりすることがあると同時に、又それに就いて判斷することもある。その違ふことは、判斷するが爲には、表象に對する注意力が減ずることもあり、表象としては細微なものに注意することもある事實を考へても分る。これは物を見たり聞いたりする時には、自己の全努力を物に集中するが、判斷する時には、注意力はもつぱら選ばれたものに對する判斷に集中するからである。言語はもとより概念の記號には違ひないが、われ〳〵が日常に語るところは、概念に關係しないことが多い。概念を現す單語を連結して、この文は出來てゐるが、云

つてゐる所は、單に今見てゐる映像にのみ關してゐる。

國語の主語述語の關係が必ずしも、對極關係でないと同時に、對極關係は必ずしも主語述語の間にのみ成立つものでない。

この本は僕が書いた

これは提部と稱するものに於ける對極關係である。英語では、論理的主語は必ず文法上の主語である。それ故にこの文は、This book was written by me. と云はなければならない。

國語の客語や論理的主語以外の主語は、述語の客體たり主體たるものを言表して居り、述語の補充成分である。用言の說明してゐる概念は、その主體・目的・標準・場所・時間等を捨象したる物の屬性概念を云ひあらはすに過ぎないからである。國語の文に於ては、主語のないことが極めて普通である。國語の主語述語の關係は、論理的主語以外は、同極關係で、主語は述語に從屬してゐる。英語の主語述語の關係が、對極關係で、從つて動詞の語形變化は主語と相應じ、動詞が終止すると否とが主語と相俟つて始めて定まるのと違ふ。

主語と述語との關係が同極關係であり、主語は述語の從分であることを理解するならば

櫻は花がさいた

支那は人口多し

と云ふ形が國語に特にあらはれるのを怪しむに及ばない。「花がさいた」「人口多し」は一個の用言と同じ資格を以て文の構成に與る。それ故に體言を主語とするものの述語となつて、「櫻は花が咲いた」「支那は人口多し」等の文を造つて、判斷の主辭たる「櫻は」「支那は」を主語として、その述語の役目を果してゐる。「櫻は」「支那は」等は、總主と云はれてゐる。

文はまた修飾語と述語とから成つてゐることもある。「打てば響く」と云ふやうな構成は、常に見うける國語の事實である。われ〳〵は普通之を完全な文として、何人も之に主語や客語の存在を考へることはない。

然らば文の成分は、どういふ位地・形式を以て文の構成に與るか。平叙文や命令文では述語は常に文の終に在る。疑問文でも、平叙文と述語の位地の變らないことは、西洋の諸國語と比較して注意すべきことである。

主語は述語の上に在る。初に遡れば、主語は單に述語の上に位すると云ふ丈で、それをあらはす體言は、何ら形態上、特別の變化を發達させてゐない。西洋の言語が、體言の格をあらはす特定の形式を發達させてゐるのと、趣がちがふ。

主格をあらはす助詞も初はなかつた。

韓國をいかに言ふことぞ、目頬子來る。向放くる壹岐の渡りを目頬子來る(紀)

よもすがら雨やまず(土佐)

院政鎌倉時代以後「が」が主格をあらはす助詞として發達し、近代語では主語の位地が明瞭になつて來た。「が」「の」は共に、もとたゞ係屬をあらはすものであつたことは助詞の條に述べた通りであるが、こゝに至つて、「の」はもつぱら係屬をあらはし、「が」は主語をあらはすこととなつた。

客語もまた單に述語の上にあると云ふ外はない。客語をあらはす體言に格を語形上發達させてゐないことは、主語の場合と同じ。それ故に、總じて體言の格は、國語では文章法上の問題で、品詞論の問題ではない。

客語と主語との關係は、普通の場合は主語が客語よりも上に在る。それ故に、國語の文の成分は

主—客—述

と云ふのが、最も自然の順序である。

客語には「を」「に」「へ」「と」「より」「から」「まで」等の助詞が附く。このうち「を」は古くは附けなかつた。

尙その事申し侍らむ、そこに侍はむはいかに(枕)

月夜あきてむ馬しましとめ(萬一九)

御返り疾く賜はつて參りなむ(源夢浮橋)

からうたこゑあげていひけり(土佐)

「を」はもと感動助詞であつたことは、前に述べた。この助詞は古代語では一般に發達が不十分であつた。中世にも假名書論語に顏淵問レ仁、仲弓問レ仁などはつねに、「がんねんしんとう」「ちうきうしむとふ」と云ふやうに訓み、子不レ語二怪力亂神一は「し、くわい・りよく・らん・しんかたらず」と云ふやうに訓んでゐる。また中世之がうける名詞が撥音で終る場合、融合して「の」となつてゐるものがあるのは、當時の連聲の特殊の習慣である。

莊子カ小知小見ノ破ントテ、ウクワツヲ云也(莊子抄一)

次の如きは、全くこれからの類推であらう。

玄冥ハ玄ハ深ク遠イ處、冥ハ幽寂ノ稱シテクライ處ソ(莊子抄三)

修飾語は、修飾されるもの丶前に在る。連體修飾語は體言の前に在り、連用修飾語は用言の前に在る。

總主や提部は國語の文に於ける特殊の成分で、主語の上にある。提部は又

大日本帝國は、萬世一系の天皇之を統治す

帝國議會は毎年之を召集す

と云ふやうに、之をもう一度客語として繰返すことがあり、國語としては異樣であるが、これは全く漢文の訓讀法から來たものである。漢文に於ける「之」は代名詞と云ふよりも、むしろ述語に從屬する助辭として、殆ど無意味に用ひるものが多い。

夫貉五穀不レ生、惟黍生レ之。(孟子告子章句下)

國語の提部再說は全く、その影響に過ぎない。

感嘆文は、平叙文が常に用言、もしくは活用連語で終るのに對して、體言もしくは體言の性質を有するものを以て、總主分としてゐることを特徴とする。

咏嘆をあらはす感嘆文には、「よ」「や」「を」「はや」「はも」「か」「かも」「かな」等の感動助詞を伴ふ。その修飾語は、用言、活用連語もしくは之を主分とする連語なる時はその連體形を以て從屬し、體言もしくは形容詞の語幹が修飾語なる時は、助詞「の」の助を借りる。

心をぬさとくだく旅かな(古今)

ありがたのわざや(竹取)

和御寮に心筑紫弓ひくに心强の心や(閑吟集)

形容詞の語幹に「さ」のついて出來た體言が總主分たることがある。この場合には、修飾語が本來の體言である時と、用言、活用連語であるのとで、從屬の仕方がちがふ。前者に於ては助詞「の」をつけて

こゑのかなしさ(後撰)

かう思し歎かすばかりなりけむ宿世の高さよ(源氏夕貌)

と云ふが、後者に於ては

見るがわびしさ(古今)

さゝがにの振舞しるき夕ぐれにひるますぐせと言ふがあやなさ(源氏、帚木)

のやうに「が」を用ふ。

願望をあらはす感嘆文は體言もしくは體言に準ぜられたものに、願望の助詞「が」「がな」を

加へたもので出來てゐる。

本來の體言の場合は、「も」を介して「が」「がな」に連る。

老いず死なずの藥もが（古今）

大空に覆ふばかりの袖もがな（後撰）

の如きは體言に準ぜられたものに「がな」のついたものである。

いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがな（竹取）

今はいかで見聞かずもありにしがな（蜻蛉）

體言が連體修飾語を持つて、感動助詞を伴はずに感嘆文を成すことは、準語に於ける形式と見るべきである。

第十二章　文の連結

文は連結して、一層大きな文になる。平叙文は用言、活用連語の終止形を以て完結してゐるが、これを他の活用形に變へ、又助詞の助を假りて、他の單語連語もしくは文に從屬したり、接續することが出來る。普通に文章法に於ては、主語と述語とを具へてゐる文が、他の文に連結する場合を標準として、文の構成を研究し、その上で文の種類が論ぜられてゐるが、國語の文は主語を具へないことが多いから、「檜、人近からぬものなれど、みつばよつばの殿づくりもをかし」と云ふやうな類の形式を具へてゐるものは、實際に於ては、さう多くなく、

それは何ばかりならぬつかひ人なれど、かたはらいたし（枕）

人めかすべきにもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたげなり（同）

と云ふやうなものが普通であり、之を單文・複文・重文の形式にあてはめて論ずるところに說明の無理があり、觀察の不完全なところが生じて來る。今日までの文章法は、かりに西洋の文章法の形式に當てはめて、國語の文を觀察して見たまでのもので、西洋の文が對極關係にある

のに、國語の文が必ずしもさうでないことが分れば、根本に於て大きい間違のあることを想像し得る筈である。「打てば響く」と云ふやうなものも、國語では一個の文であると述べた。「ありや、なしや」と云ふやうな文もある。一は、從屬關係、他は同格關係である。「酒はいたゞきません」と云ふやうな對極關係の文もある。同樣にたゞ一つの客語が文に從屬することもある。

中の品になむ、人の心々おのがじゝの立てたる趣も見えて、わかるべき事かたゞ〳〵多かるべき（源氏帚木）

と云ふやうなものである。反對に又一個の述語に文が從屬することもある。

受領と云ひて、他の國の事にかゝづらひ營みて、品定まりたるなかにも、亦きさみ〳〵ありて、中の品のけしうはあらぬ、えり出でつべき頃ほひなり（源氏帚木）

今日の文章法として說かれてゐるものゝ不完全なことは、誰も認めてゐることだが、實際に於て國語の文の構成は複雜で、今日に於ては尙簡單に說明し得るまでになつてゐない。それ故に今は文は單語や連語や文に從屬もするし、接續もし、又單語や連語や文が他の文に從屬したり、接續するものとして、文が從屬したり、接續したりする場合の、文の成分に於ける制約を觀察し、又從屬したり接續する場合の連結の方法を研究するにとゞめる外はない。

文の連結を、從屬性の大小を以て觀察すると、對極關係の文は、從屬關係の文に比べて、從屬することが困難である。

同じ從屬と云つても、引用文のごときは、文の成分としては從屬の位置にあるが、引用文そのものは、原形を崩さずに挿入され、半ば獨立のものだから、この場合は特に對極關係のあらはれることが最も容易であるのは勿論である。

引用文ははじめは

機取の申したてまつることは、「このぬさちる方に御船すみやかに漕がしめ給へ」と申してたてまつる（土佐）

或は

人々いはく、「この河飛鳥川にあらねば、淵瀨かはらざりけり」と云ひて

と云ふ形を取り、宣命や祝詞には定型となつて居たが、後には

大殿、「あやしや物の師をこそまづは物めかしめ給はめ、愁はしきことなり」と宣ふに（源氏若菜上）

と云ふやうな、下にだけ引用を示す形になつた。國語の文章法としては省略の行はれたものと云ふべきである。

引用文は普通「と」を伴ふが、「など」を用ひて

世に久しかるまじき心地なむするなど宣はせて（源氏若菜上）

と云ひ、中古語には「と」の代りをしてゐたが、院政鎌倉時代以後、「など」の下に又「と」をつけ、又「なんど」といふ形もあらはれた。

一念こそよけれ、多念こそよけれなんどまふすことも（親鸞消息）

従属するものは、他の文に對して、主格となり客格となり、又修飾格に立つ。

御前の若楓、柏木などの青やかに、繁りあひたるが、何となく心地よげなる空を見出し給ひて、「和して清し」とうち誦じ給ひて（源氏胡蝶）

これは一の文の述語が連體形になつて、主格に立つものである。この場合、奈良朝時代には、終止形そのまゝのものがある。これはその文が存在繼續態の助動詞で終つてゐる場合で、それを受ける述語が「見ゆ」と云ふ動詞に限られてゐるのを見れば、前の時代の用法が慣用語として殘つてゐるものと見られる。

潮瀨の波折を見れば遊びくる鮪が鰭手に妻立てり見ゆ（記）

あしびきの山にも野にもみ狩人さつ矢たばさみ亂りたり見ゆ（萬六）

蜑處女玉求むらし沖つ波かしこき海に舟出せり見ゆ（同六）

印南野は行過ぎぬらしあまづたふ日笠の浦に波立てり見ゆ（同七）

蜑小舟帆かも張れると見るまでに鞆の浦回に波立たり見ゆ（同）

久方の月は照りたり暇なく海人のいさりはともしあへり見ゆ（同一五）

確はたぶせの下にわが夫子はにふぐに笑みて立ちませり見ゆ（同一六）

さきの連體形の用法は、往々下に體言の省略されたものと解釋されむとするが、嘗てはかゝる終止形が同じ用法に立つてゐたことを見ると、連體形の場合も、體言としての取扱ひを受けたまでゝ、省略と見ることの誤であることが明かである。

河ぞひ柳のおきふし靡く水影など疎ならずをかしきを見ならひ給はぬ人は、いと珍らしく見捨てがたしとおぼさる（源氏椎本）

これは客格に立つたものである。

修飾格には連體修飾格と、連用修飾格とある。

聲にくからざらむ人なむ思はしかるべき（枕）

ことさらに人來まじきかくれがを求めたるなり（源氏夕臭）

これは前者の例である。

色深くそめし袂のいとどしく涙にさへもこさまさるかな（後撰）

その男がしりはな血あゆばかりかならず蹴たまへ（宇治拾遺）

秋津野に朝ゐる雲の失せぬれば、昨日もけふも亡き人思ほゆ（萬七）

いみじき過ありとも、心弱く赦しつべき御有様かなと見奉り給ふ（源氏、柏木）

これは後者の例である。

奈良朝時代には、述語の終止したものが「に」を伴ふことにより、連用修飾格に立つことがある。これは殆ど「なし」の場合に限られてゐる。

慰むる心はなしに雲隱りなきゆく鳴の（萬五）

過所なしに關とびこゆる霍公鳥（同一五）

上代語では、文の主語に、「が」「の」のあらはれるのは、述語が連體形である場合に、限られてゐるが、文が從屬の形をとる時には、「が」「の」が好んで主語の下に用ひられる。かれに於て、「の」「が」のあるのは、下の述語たる用言の體言的取扱を受けたものに從屬することを示すものであつたが、これに於ても、文が從屬する上に主語が從分たる位地にあることを明かにして、成分の關係を緊密にするために、この助詞が用ひられるのである。

連體修飾格には、對極關係は殆ど無く、

鳥は今ねぐらを占むる梢にも、花はとまらぬ春風ぞ吹く（新續古今）

の如きは、希有の異例と云はなければならぬ。

連用修飾格に於ては、順說には既定の條件をあらはす場合、

宮はその頃まかんで給ひぬれば、例の隙もやと窺ひありき給ふを事にて、大殿には騷がれ給ふ（源氏、紅葉賀）

の如く云ふが、假定條件にはない。

對極關係の文が連結するのは、接續する場合卽ち次に述べる同格に連結する時に於て最も普通であり、又其の次に多いのは、逆說の條件をあらはす場合である。

わが宿の櫻の色はうすくとも花のさかりは來ても折らなむ（後撰）

から人の袖ふることは遠けれど立居につけてあはれとは見き（源氏紅葉賀）

一の文が他の文に接續するものは中止形を以てする。

本ごとに浪うちよせ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ（土佐）

正月に寺に籠りたるはいみじく寒く、雪がちにこもりたるこそをかしけれ（枕）

中止形を用ふるかはりに、助動詞「つ」の連用形の助詞のやうな役目をしてゐる「て」を連用形

につけて用ふる方法がある。

そのはじめは、

此所をうち過ぎて、濱松の浦に來りぬ(海道記)

の如く、「て」は完了を意味し、或動作が終つて、他の動作に引續く意味を持つてゐたことは疑はれないが、次第に單に連結の役目をのみ成すやうになつたもので、中止形を用ひたものとの間は區別の附けられぬものが多い。

月落ち、烏啼きて、霜天に滿つ

は、たゞ三つの文が同格關係を以て、接續してゐるばかりである。形容詞の連用形に「て」をつけた

かの草とおぼしきものはなくて稻のみぞ多く見ゆる(東關紀行)、

の如きは、もつともその趣が明かである。後世に至るほど、中止形そのもので連結することは少くなり、この「て」による連結が多くなつた。それ故、今日の口語で、中止形を用ふる方は、記載語に偏つてゐる。

之に接續詞を補ふことが、新しい時代に多くなつた。漢文の影響から來てゐる。

其の子一百八十一神ありて、以て天下を經營し(中朝事實)

天皇の命を承けて、且父の業を成さむと欲し(同)

國語では、論理的關係のない場合でも、文はいくつでも文法的の方法で繫るのを特徴としてゐる。

今昔、上東門院ノ京極殿ニ住マセ給ケル時、三月ノ廿日餘ノ比花ノ盛ニテ、南面ノ櫻、艶ズ榮(エモイハサキ)亂レタリケルニ、院寢殿ニテ聞カセ給ケレバ、南面ノ日隱シノ間ノ程ニ極ジク氣高ク神サビタル音ヲ以テ、コボレテニホフ花ザクラカナト、長メケレバ、其ノ音ヲ院聞カセ給ヒテ、此ハ何ナル人ノ有ルゾト思シ食テ、御障子ノ被レ上タリケレバ、御簾ノ内ヨリ御覽ジケルニ、何ニモ人ノ氣色モ無カリケレバ、此ハ何カニ誰カ云ツル事ゾトテ、數ノ人ヲ召テ見セサセ給ケルニ、近クモ遠クモ人不レ候ズト申ケレバ、其ノ時ニ驚カセ給テ、此ハ何カニ鬼神ナドノ云ケル事カト恐ヂ怖レサセ給テ、關白殿ハ口殿ニ御マシケルニ、急テ此ル事コソ候ヒツレト申サセ給ヒケレバ、殿ノ御返事ニ其レハ其ノ口ニテ常ニ然樣ニ長メ候フ也トゾ御返事有ケル(今昔二七)

かう云ふ長い文の連結は、西洋の言語には見られないものであらう。

感嘆文は感嘆文と連結して、

かひがねをさやにも見しが、けゝれなく横ほりふせるさやの中山(古今)

いたづらにたつや淺間の夕煙、里とひかぬるをちこちの山(新古今)

と云ふ形のものもあり、平叙文と合して、

尋ね見るつらき心の奥の海よ、汐干のかたにいひかひもなし(新古今)

其の身はさながら苔の下にくちにければ、わづかに埋もれる名ばかりを、しるしとゞむるあはれさよ(十訓抄)

となることもある。

引用文法史料略註

〔一〕奈良朝時代

古事記　和銅五年(一三七二)太安萬侶撰

日本書紀　養老四年(一三八〇)舍人親王、太安萬侶等撰

延喜式祝詞　祭祀の詞であるから、原形は古く成立したもので、延喜式(延長五年)に收められるまでに、變化改刪を蒙つたに違ひないが、宣長の云つた通り、大寶令の頃か、又はそれより以前、天智文武兩朝頃に大體は固定したものと見てよからう。

佛足石歌　佛足石落慶直後と思はれるから、天平勝寶四年(一四一二)の作だらう。

萬葉集　天平寶字三年(一四一九)頃にほゞ成立し、平安朝に至るまで後人の補修が加り、現存の形になつたのは、平城天皇の御代か(久松潛一氏說)。

續紀宣命　文武天皇元年(一三五七)卽位の詔から、桓武天皇延曆八年(一四四九)の詔まで六十二詔。

日本靈異記　弘仁頃の成立だが、傳說と共に歌は奈良朝時代のものである。

〔二〕平安朝時代

神樂歌　奈良朝末より平安朝初に作られたものが多く、之に整理を加へたのは、清和天皇の御代から圓融花山兩朝頃までの間で、最後に源雅信（一五七九―一六五三）が大修正を施したと云ふ。

催馬樂歌　大部分地方の民謠若しくは童謠で、神樂歌と同じく、奈良朝末から平安朝初期に出來たもの。弘仁（一四七〇―一四八三）前後から、貴族の間に遊宴の餘興として謠はれるものとなつた。

竹取物語　藤岡作太郎氏の說の如く、貞觀から延喜（一五一九―一五八二）の間の作と見てよからう。

伊勢物語　在原業平の歿（元慶四年、一五四〇）後、間もなく出來たもの。但し現存の形を具へたのは、延喜前後と云はれる。

大和物語　天曆年中（一六〇七―一六一六）成立。

新選字鏡　昌泰年中（一五五八―一五六〇）昌住撰。抄本と完本とある。享和三年の刊本は抄本。本文一冊校異一冊ある。完本は天治年中書寫のもの、全部十二卷ある。

古今和歌集　延喜五年（一五六五）紀貫之等撰進。但し延喜七年頃の歌があるから、奏覽はそれ以後と云ふ說がある。

和名類聚集（和名抄）　醍醐天皇の皇女勤子內親王の仰せにより、朱雀天皇の承平年中（一五九一―一五九七）源順撰。

土佐日記　承平五年（一五九五）紀貫之が土佐守の任果てゝ海路京に上る時の日記。

後撰集　天曆五年（一六一一）撰進。

蜻蛉日記　天曆八年（一六一四）から天延二年（一六三四）までの日記。

宇津保物語　圓融花山二帝頃（一六三〇―一六四六）の作と云ふ說があるが、異說もある。

落窪物語　圓融花山兩朝ごろの作であらう。

古今六帖　眞淵は古今集以前の成立と考へたが、後撰以後拾遺以前の成立とする契沖の說を取るべきであらう。

拾遺和歌集　八雲御抄には、長德（一六五五―一六五八）頃の成立とし、保己一は長保三年（一六六一）とする。

和泉式部日記　長保五年（一六六三）から、同六年（一六六四）までの日記。

枕草子　寬和二年（一六四六）と思はれる記事が最初で、長保二年（一六六〇）と思はれる記事が最後であるから、その以後に完成したものだらう。

源氏物語　寛弘五年(一六六八)に、一部は出來てゐたことが明かだが、その完成はいつか分らない。

紫式部日記　寛弘五年(一六六八)から、同七年(一六七〇)までの日記。

狭衣物語　藤岡作太郎氏は、永承、天喜頃(一七〇六―一七一七)の作とし、津田左右吉氏は、白河院御在位(一七三三―一七四六)頃の作とする。

更級日記　寛仁四年(一六八〇)より、康平二年(一七一九)と思はれるまでの日記。康平二年以後十二年の間に追記したもの。

〔三〕院政鎌倉時代

今昔物語　宇治大納言源隆國(一六六四―一七三七)の作と云はれる。

榮華物語　堀河天皇の御世(一七四七―一七六七)に出來たもの。但し上篇は長元二年(一六八九)―同六年―(一六九三)に出來たと云ふ和田英松氏の説がある。

大鏡　作者は萬壽二年の作のやうに裝つてゐるが、白河天皇(御在位一七三三―一七四六)以後の作である。

法華修法一百坐聞書抄　天仁三年(一七七〇)に行はれた百坐の法華修法會の説經を筆記したもの。現存の法隆寺所藏のものは、後の抄出にかゝるが、天仁を去る遠くない頃のもの。

讃岐典侍日記　喜承二年(一七六七)から、天仁元年(一七六八)まで前後二年間の日記。

類聚名義抄　菅原是善撰と云はれたのは誤で、この時代のものに違ひない。山田孝雄氏は「後一條天皇頃から堀河天皇の頃までの間に出來た」と云はれる。

童蒙頌韻　天仁二年(一七六九)三善爲康撰。

色葉字類抄　橘忠兼撰　二卷本、三卷本、十卷本の三種がある。天養より長寛頃(一八〇四―一八二四)までに作つたものが二卷本で、もつとも古いもの。三卷本は之れを增補して治承頃に出來た。三種の傳本中最も古い。黒川家所藏本は三卷揃つてゐるが、後世の書寫にかゝる。十卷本は鎌倉時代に何人か增補したもの。

梁塵秘抄　後白河天皇(御在位一八一七―一八一八)の御撰。

とりかへばや物語　原作は院政時代で、鎌倉時代初期に改竄されたものであらう。

山家集　西行(一七七八―一八五〇)の歌集。成立の年時は未詳。

寶物集　平康頼撰。成立は異説があるが、治承二・三年頃(一八三八、九)であらう。

千載和歌集　序文によれば、文治三年(一八四七)成立。

古今集註　顯昭撰、壽永二年(一八四三)頃より起筆し、建久二年(一八五一)完成。

後鳥羽院御百首　正治二年(一八六〇)御撰。

千五百番歌合　建仁元年(一八六一)後鳥羽院以下當代の名匠三十家の作。

新古今和歌集　建仁元年撰進の院宣下り、元久二年(一八六五)に成立。その後しば〳〵切繼が行はれた。

宇治拾遺物語　成立は建保年間(一八七三―一八七八)と云はれる。

平家物語　建久以後承久二年(一八八〇)成立と云ふ說に從ふがよからうが、異本が非常に多い。現存異本中最古のものは延慶本。

源平盛衰記　平家物語の異本の一種と見るべきもの。

保元物語　原作の成立は、平家物語と相前後して居るが、流布本には後の增補が加つてゐる。

平治物語　保元物語と同一作者の手に成ると見られてゐる。流布本には、保元物語と同樣、增補が加つてゐる。

建曆御記(禁秘抄)　室町時代以後禁秘抄の名に定まる。書名は建曆帝記と云ふほどの意味で、成立年代をあらはすのでなく、建保六年(一八七八)御起稿、承久三年(一八八一)御脫稿と見られる。

宇鏡集　菅原爲長(一八一八―一九〇六)の撰。

萬代和歌集　寶治二年(一九〇八)撰。勅撰集に見える歌も見えるが、主として鎌倉時代の人々の作。私撰類題和歌集の先驅。

親鸞消息　親鸞は承安三年(一八三三)に生れ、弘長三年(一九二二)歿。

吾妻鏡　治承四年(一八四〇)頼朝擧兵から、文永三年(一九二六)惟康親王が將軍に擁立されるまで凡そ八十七年間に亙る鎌倉幕府の日記體の記錄。

開目抄　文永九年(一九三二)日蓮撰。

沙石集　弘安二年に書き始め、弘安六年(一九四二)に書き終へてゐるが、永仁三年、德治三年等の加筆がある。

中務內侍日記　伏見天皇に仕へた中務內侍の日記で、後宇多院の弘安三年(一九四〇)に始り、伏見天皇の正應五年(一九五二)に終つてゐる。後年追憶して、書き加へた所もあると云ふ說(池田龜鑑氏)がある。

夫木和歌抄　著者藤原長淸は冷泉爲相(一九二三―一九八八)に擧んだ人だから、伏見天皇の朝又は之を距る遠からざる頃出來たものだらう。

假名がき論語　元弘三年(一九九三)成立と云はれる。

增鏡　建武中興(一九九四)後、間もなく出來たものと云ふ伴信友の說に從ふ。

〔四〕室町時代

平他字類抄　元中(二〇四四―二〇四六)頃の撰。

義經記　成立については定説がないが、室町時代の初期から中期までの間であらう。

今川大双紙　今川了俊(一九八五―二〇八〇)の撰。

謠曲　今に存するもの約五百番。内百番が最もよく行なれ、之に次ぐ外百番の他に、番外百番、續番外百番、續々番外百番等がある。應永(二〇五四―二〇八七)頃から豐臣氏の時代にかけて作られたもの。

勅規桃源抄　雲章(二〇四六―二一一三)の講義を瑞仙桃源(二〇九〇―二一四九)が筆記したもの、寛正三年(二一一二)完成。百丈清規抄と題した本もある。

史記抄　前記桃源の抄。

蒙求抄　享祿二年(二一八九)の抄。

湯山千句　明應九年(二一六〇)桃源の弟子周鱗(景徐)の抄したもの、寛永七年刊。

四河入海　笑雲清三抄。大永七年(二一八七)始筆、天文三年(二一九四)絶筆。

山谷詩抄　林宗二(二一五八―二二四一)の抄。各卷に奥書がある。例、永祿九年丙寅七月十五日申刻抄之。宗二六十九歳(十九卷末)。

古文眞寶抄　此抄者一元和尚就桂林和尚聽之聽書也の奥書があり、永正十五年戊寅(二一七八)の抄。

三體詩絶句抄　元和六年刊。

古文眞寶之抄　桂林德昌、萬里周九、一元、湖月信鏡の手抄を笑雲清三が集大成したもの。大永五年(二一八五)の奥書がある。

中華若木詩抄　月舟の弟子如月壽印の抄。

碧巖抄　寛永十八年刊。

莊子抄　正保二年刊。卷三の文中に「サツクルトヨムト萬里ノ云レタソ」とあるから、成立は他の抄と同じ頃であらう。

三體詩法三體家法　紫陽素隱の鈔、寛永十四年刊。

錦繡段抄　月舟壽桂(二二〇三歿)の抄。

宗門葛藤集(句雙葛藤鈔)　元祿五年刊。

閑吟集　永正十五年(二一七八)に出來たもの。連歌師柴屋軒宗長を編者とする説(志田延義氏)がある。中流以下に行はれた作り歌及び民謠三百餘首を集めてある。

狂言記　もと口傳によつて傳つたもので、萬治三年以後版になつた。今日傳るもの、繪入狂言記(萬治三年刊、寛文三年再版)、同(寛文五年刊)、新板繪入狂言記外五十番(元祿十三年刊)、繪入續狂言記(元祿十三年刊)、繪入狂言記拾遺(享保十五年刊)等がある。これらは自然、改作を經た疑があるが、淨瑠璃が成立當時の語法であると同樣、室町時代の用語をあまり變へてゐないであらう。

天正日記　內藤淸成(德川氏の臣)の天正十八年の日記、慶長の殘闕が少し添へられてゐる。

天草本平家物語　實の名は、Nifon no cotoba to historia uo narai xiran to fossuru fito no tameni xeua ni yavaragetaru Feiqe no monogatari 文祿二年(一二五三)天草出版。

天草本伊曾保物語　(Esopo no Fabulas) 同。

ロードリゲース日本語典　(Joaõ Rodrigues, Arte da lingoa de Japan) 慶長九年(一二六四)長崎出版。

〔五〕江戸時代

おあんものがたり　石田三成に仕へた山田去暦と云ふ者の娘が、慶長五年の亂に、大垣城に立籠つたときの話を口語體で書いたもの。

醒醉笑　安樂庵策傳が幼時より聞いた笑話を、元和九年七十歳のとき書き記したもの。

きのふはけふの物語　慶長末の記事がある。その頃の成立。元和から寛永初年頃刊行。

雜兵物語　雜兵の說話に托して、故ら俚言を以て書いたもの。松平信興(一二八九—一三五一)の撰。

武道達者　元祿六年(一三五三)、京都都萬太夫座興行歌舞狂伎言本。

萬歲丸　元祿七年興行同狂言本。

日本月蓋長者　同狂言本、武道達者と同じ頃のもの。

兵根元曾我　元祿十年(一三五七)江戸中村坐興行歌舞伎狂言本。

京ひながた　元祿十二年(一三五九)京都龜屋座興行歌舞伎狂言本。

一心女雷師　同年江戸山村座興行歌舞伎狂言本。

成田山分身不動　元祿十六年(一三六三)江戸森田座興行同。

傾城角田川　寶永元年(一三六四)山村座興行同。

傾城曉の鐘　同五年(一三六八)京都龜屋座興行同。

八景聞取法問　滑稽本。寶曆四年(一四一四)刊。梅牆撰。

太平樂卷物　洒落本。平賀源內(一四三九歿)撰。

品川楊枝　同。寛政十一年(一四五九)刊。芝晉交撰。

東海道中膝栗毛　享和二年(二四六一)に初篇を出し、文化六年(二四六九)までに八篇を出して、發端一篇を文化十一年に作る。

浮世風呂　前篇二冊は文化五年(二四六〇)脱稿、翌年刊。二篇は文化七年(二四七〇)、三篇四篇は同九年(二四七二)刊。

浮世床　初篇は文化八年(二四七一)の自序あり。二篇の序は同九年。三篇は文政六年(二四八三)に出來た。

花暦八笑人　瀧亭鯉丈撰。初篇文政三年、二篇四年、三篇同追加は不明、四篇同追加は天保五年(二四九四)に出來、未完であつたが、一筆庵等が嘉永二年(二五〇九)に五篇を出して完結。

索引

――数字は頁数――

あ

あ・あれ(人代名詞)…一七、一八、二〇
あ・あれ(指示代名詞)…二一、二三、二四
あすこ……二三
あそこ……二三、二〇
あち……二三
あなた……一九、二三、二五、二七、二九
あひだ……九四
あらびる……六五

い

イ音便……一〇三―一〇五、一二九、一三一
生く……五九
いさちる……六五
已然形(形容詞の)……一二九―一四二
已然形(動詞の)……八七―九八
一段化……六八―七四、一六二
いつ……二三
いづくんぞ……一五〇
いづこ……二三
いづれ……二三
いどこにしてか……二三
いまし……一九、二〇
います……一七
引用文……二七五、二七六

う

う(助動詞)……一九六
ウ音便……一〇三―一〇七、一三〇、一三六
うず(助動詞)……二〇〇

お

おそる……五三、五七
おはします……一七一
おはす・おはさふ……一七一
おまつす……一六八
おまへ……二五、二七、三一
おまらす……一六八
普雑詞……一一三
普便……一〇一

か

か・かれ(代名詞)……二一、二三、二四
か(形容詞語尾)……一一〇
か(修飾助詞)……一二九、二四
か(感動助詞)……二五〇

け

け（形容詞語尾）‥二〇、二一、二六
形容詞活用の種類……二四
形容詞語幹……二九、二六
形容動詞……二二、二六、二七、……二五―二六
けむ……二二
ける（蹴）……六五
けれども（終止連體形に附く）‥……九六、二三

こ

こ・これ……二一、二二、二四
語幹……二六
ここ……二二、二九、三〇
ございます……二三〇
こさんなれ……二四〇
どさんなれ……二四〇
どさんめれ……二四一
こそ……八九、七七、八六、二四、二五
こと……二二、二九、三〇
ことし……二三〇
ことす（掘）……六三
ことち……二二、二九、三〇
ごとし……二三〇
こなた……二二、二九、三〇

さ

左行變格活用……七七、七八、九九
さく（放）……五四
さす（助動詞）……二六―二七
さすらふ……六二
さはだ……二四八
さふらふ……二七、二二七
さく……二三四

し

し（時の助動詞）……二九二
し（修飾助詞）……二四二
じ……二六六
修飾語……二七〇
修飾助詞……二三五
時階……一六
指示代名詞……二二、二三
しま・しむ・しも（尊敬）‥二四、二七五
しむ（使役・尊敬）‥二六、二四、二七
下二段活用……七二、七三、九九
終止形（形容詞の）……二三七
終止形（動詞の）……八五、八六
終止形の連體形化……六五、六七
從屬關係……二六五
從分……二六五、二六四
熟語……二六
主格……二六六
主語……二六四、二六六、二七七、二七四
述語‥二六四、二六六、二七七、二七四、二七六
主分……二六五、二六四
助詞……二三五
助數詞……二四、二五、二七
助數詞と支那語……二七
助動詞……二九五

き

きこゆ……二七二
きさま……二五、二六、二七
きみ……二七
疑問文……二六七
きんぢ……二〇、二二

く

活用……二九、四〇
活用形……八〇、八二
活用の起源……四一―五〇
關係助詞……二二五、二二六
關西方言‥一一一、一〇七、一二〇、一二六、‥一八一、一八五、一九五、一九九、‥二〇一
關東方言‥一〇一、一一一、一二〇、一四七、‥一八一、一八五、一九六、一九九、‥二〇一、二二〇

が（關係助詞・格）……二二六、二六二、……二二四、二二六、二二八
が（關係助詞・法）……二二一
が（感動助詞）……二九、二七一
加行變格活用……六六、九九、一〇〇
客格……二七七
客語……二二四、二二六、二二六、二二九
かくる……二六六
かし（感動助詞）……二五二
かしこ……二二
かな……二二〇
がな……二九、二二〇、二七二
かなた……二二
假字遣……一〇二
上二段活用……七一、七三
から……二四、二二六
感嘆文……二二六、二二七、二二〇、……二二一、二二〇
感動詞……二二六
感動助詞……二二六

促音便……一〇九、一一三
そこ……二二、二〇
そち……二二、二〇
そなた……一九、二二、二〇
そら……二二四

た

た・たれ……一七、一八
た(時の助動詞)……一九三、一九四
だ(指定の助動詞)……二二四―二二六
對極關係……二六五、二七四
代名詞……一七
たうぶ(給)……一七一
たし……一〇二
たゝふ(湛)……六一
たてまつる……一七一
だに……二三四―二三六
たぶ(給)……一七〇
たまふ……一七、一七一
たり(指定)……二二三
たり(時の助動詞)……一九〇―一九二
たる(垂)……五六、五七
單文……二七三

ち

ぢや……二二四―二二六
重文……二七三

つ

つ(助動詞)……一八九、一九〇、一九二
つかうまつる……一七一

て

で(否定)……一八五
提部……二六六、二七〇
提部再説……二七〇
です……二二八、二二九
轉呼音……一〇三

と

と……二二九、二六九
と・とも……八六、九七、二二一
ど・ども……九五、二二一
統覺……二五三
同格關係……二六三
同極關係……二六三
どこ……二二
動作態……二八八
動詞活用の種類……五四―六二
――(現代口語)……六四
――(奈良朝時代)……六二
――(平安朝時代)……六二
とゞむ……五五、五六
どれ……二二

な

な・なれ(代名詞)……一七、一八
な(否定)……一八一
な(禁止)……二二二
な―そ……二二二
な(感動助詞)……二四七
ない(否定)……一八一、一八四、一八五
なかつた……一八四
なかんづく……一五〇
奈行變格活用……七四、九八、一〇七、一〇八
なぐ(和)……六〇
なずらふ……六一
なに……一四六
なふ(否定)……一八三
なむ(感動助詞)……二四八
なむ(なも)(修飾助詞)……二三九、二三八
なむし(否定の過去)……一八三
なむたち……二二
なり(指定)……二二三
なんだ……一八四
なんだち……二二
なんぢ……二〇、二二

に

に(格を示す)……二二八、二六九
に(法を示す)……二二一
に(否定)……一八〇
判斷……二六五、二六七

ぬ

ぬ(否定)……一八一
ぬ(時の助動詞)……一八九、一九〇、一九二

の

の……二二六、二六八、二七八

は

は(修飾助詞)……二二三、二六四
は(感動助詞)……二二〇
ば(關係助詞・法)……二二一
波行延言……一八九
はく(著)……五四
ばし……二四二
はす(馳)……五五
撥音便……一〇七―一〇九
はべり……一七三、二二七
ばや……二四八

ふ

副詞……二四三―二五二
複文……二七三

へ

へ(助詞)……二二八、二六九
べい(未來)……二〇二、二〇六
べいき……二〇七
べし(推量)……二〇四
べしい……二〇七
平叙文……二六七、二七三
表象……二六五
へだつ……五五
べみ……二〇四
べら……二〇四

ほ

僕……二七、二九

ほどに……九二、九三

ま

まい……一八七、一八八
まいする……一七六
まうす……一七一
まし(代名詞)……二〇
まし(推量)……二〇八
まじ……一八六
まじい……一八六
ましじ……一八六
ます(坐)……一七〇
まで……二六九
まつる(奉)……一七一
まなぶ……六一
まらす……一七六―一七八
まろ……一九
まゐらす……一七一
まをす……一七二

み

未然形(形容詞)……二四、一三五
未然形(動詞)……八二、八三
みともない……二〇四
みともよい……二〇四

む

む(未來)……一九六
む(推量)……二一一

め

命令形(動詞)……九八
命令文……二五四、二五五、二六七
めす……一七〇
めり……二〇九

も

も(未來)……一九六
も(修飾助詞)……二三三
も(感動助詞)……二三〇
もみづ……五九
もとな……一四八

や

や(修飾助詞)……一三七、二四四
や(感動助詞)……二四六
やら……二四四
やらん(やらう)……二四四

ゆ

ゆ(助動詞)……一六一
ゆ(助詞)……二三〇
ゆり(同)……二三〇

よ

よ(修飾助詞)……二三〇
よ(感動助詞)……九八、二四六
よう(未來)……一九七
よす(寄)……五五
四段活用……九八、一〇三、一〇七、一〇九
よつぼど……一五一
より……二三〇、二六九

ら

ら(感動助詞)……二五〇
らう(推量)……二三一
良行變格……七四、七五、九八、一〇九
らし……二一〇
らむ……二一一
らゆ……一六一
らる……一六〇、一六一
られる……一六〇、一六一

り

り(時の助動詞)……一九〇―一九一
琉球語……一三三、一三五

る

る……一六〇―一六三

れ

歴史的假字遣……一〇三
れる……一六〇、一六一
連體形(形容詞)……一三七―一三九
連體形(動詞)……八五、八六
連體修飾格……二七七
連體修飾語……二七〇
連用形(形容詞)……一三五―一三七
連用形(動詞)……八四
連用修飾格……二七七
連用修飾語……二七〇

ろ

ろ(命令形に附く)……一〇一、二三〇
論理的主語……二六六

わ

わ・われ……一七、一八、二〇
わし……二九
わする(忘)……五六、五七、五八
わたくし……二七、二八
わたし……二九

ゐ

ゐ……二四八

を

を(格を示す)……二三八、二六九
を(法を示す)……二三一
を(感動助詞)……二四七

ん

ん(否定)……一八一
ん(未來)……一九六

昭和十一年九月十五日印刷
昭和十一年九月二十日發行

定價二圓五十錢

日本文法史

著者　小林好日

發行者　東京市神田區駿河臺三丁目六番地　關根喜太郎

印刷者　東京市神田區神保町一丁目三四番地　尾藤光之介

發行所　東京市神田區駿河臺三丁目六番地　刀江書院
電話神田（三一八九）（三二七一）
振替東京七三二一八

版權所有

東京文理科大學教授　保科孝一著　新菊判二二〇頁　定價一圓五十錢　送料十四錢

國語政策

最新刊　世界各地に割據する民族國家は、互に生存の權利を主張して、いまや世界再分割の論すら提唱せられるに至つた。日本もまた自然の膨張は南進論を生み北方政策の論を捲き起してゐる。事實、日本は膨張した。しかし、躍進日本、膨張日本は更に翻つて内に自らの團結を強固にする必要がある。日本語は日本人同志の心の通路である。日本人は國語によつてのみ、その心を理解し合ふことが出來る。内に國民の團結を強固にし、外に日本精神を傳播するものは、軍備よりも經濟力よりも何よりも先づ國語の普及によつて遂げられる。現下の日本にとつて世界各國の國語政策をみ、わが國語政策を再檢討してみることは緊急の要事ではないか。國語教育を左右するものは國語政策である。我々はまづこの巨星の叫ぶ國語政策の熱論に耳を傾けねばならぬ。

文學博士　金田一京助著　改訂增補　**國語音韻論**　定價二・五〇　送料二・二〇

文理大教授　神保格著　**國語音聲學入門**　定價一・〇〇　送料一・一〇

早大教授　山口剛著　**日本文學史概說**　定價一・二〇　送料一・四〇

東洋大學教授　湯澤幸吉郎著　菊判七〇〇頁　定價五圓五拾錢　送料二十二錢

德川時代言語の研究

最新刊　德川時代の言語は學界未開拓の荒野である。言語の研究は、文學の研究に先行するものである。從つて德川時代の言語が明かにならなければ、德川時代の文學が理解されないのである。しかし、德川時代は歷史的に最も身近であるために、言語研究を要せずして文學研究をなし得るかの如くであるが、それは謬見である。更に現代の言語を理解する爲にも、德川時代の言語研究は必須の要件である。本書は著者の倦まざる努力によつて、最も實證的にこの難研究を成し遂げたのであつて、學界の快事である。國語研究者の必讀をすゝめる。

松岡靜雄著　改訂增補　**日本古語大辭典**〔語誌篇〕近刊

▼第三期刊行書目▲

言語誌叢刊

湯澤幸吉郎著 徳川時代言語の研究 定價五・五〇 送料二・二〇

杉村楚人冠著 和歌山方言集 定價二・二〇 送料二・二〇

内田武志著 鹿角方言集 定價二・〇〇 送料二・〇〇

眞山青果著 仙臺方言考 定價一・七〇 送料一・一〇

第一期刊行書目

柳田國男著 蝸牛考 定價一・六〇 送料一・一〇

三矢重松著 莊内語及語釋 定價一・五〇 送料一・一〇

東條操編 南島方言資料 定價二・二〇 送料一・一〇

山口麻太郎著 壹岐島方言集 定價一・八〇 送料一・一〇

第二期刊行書目

小倉進平著 仙臺方言音韻考 定價三・〇〇 送料二・二〇

大田榮太郎編 滋賀縣方言集 定價一・五〇 送料一・一〇

金田一京助著 增補改訂國語音韻論 定價二・五〇 送料一・一〇

荒垣秀雄著 北飛驒の方言 定價一・五〇 送料一・一〇

815
K012
2

終